

---

Si vis amari, ama

春桜

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S i v i s a m a r i , a m a

### 【Nコード】

N 2 1 2 0 R

### 【作者名】

春桜

### 【あらすじ】

薄桜学園に目出度く入学した雪村千鶴。期待と不安に胸を膨らませながらの入学式。その入学式に出席していた少年に千鶴は何故か無意識に話しかける。これが彼女の高校生活の始まり。明るくも儚い青春の物語です。

## 設定（読んだ方がいいです）（前書き）

ということが始まります。

登場人物は結構紹介はぶくので読んでくださると嬉しいです。  
更新遅いですがよろしく願います。

設定（読んだ方がいいです）

〈舞台〉

私立薄桜学園。

頭はそこそこいい。中の上くらい。

学校も綺麗なレンガ造り？みたいなもの。清潔感がいっぱい。  
スポーツが一番有名で、剣道が強い。ほかにもサッカーや野球も強い。

〈登場人物〉

ゆきむらちづる  
雪村千鶴

- ・ 本作の主人公。明るく、勉強熱心な華の高校一年生。
- ・ 平助とは幼馴染で家が隣。
- ・ 兄と父母との四人暮らし。

本作では千鶴の恋愛模様が中心です。

あいばねゆきね

## 愛羽雪音

本作の準主人公。オリジナルキャラ。

外見：金髪。ロング。ピアスいっぱい。化粧。目は水色。

・絶世の美人であるが素行が悪く、不良だが生徒会書記。学校で一番の成績だが性格に問題あり。

・高3で剣道部マネージャー。

・ある理由で土方と同棲。土方の恋人。

・町の不良を束ねているボス的な存在。

・煙草吸ってる。

あめざわそらゆき

## 雨沢空幸

外見：金色のメッシュで茶髪。メガネ。関西人。オリジナルキャラ

・雪音と中学時代からの同級生。

・雪音と同じクラス。

・関西出身で、生徒会の手伝いをしている。

ひじかたとしぞう

## 土方歳三

・鬼と恐れられる薄桜学園剣道部顧問で国語科教師。

・千鶴の担任。

・沖田の悪戯で病んでる。

・雪音とある理由で同棲。しかし彼は保護者のつもり。

・煙草はかせせない。値上がりしても禁煙する気なし。

おきたそうじ  
沖田総司

・剣道部部长、高2。剣道の全国大会優勝者。

・学校一のモテ男。

・DS

・小さい頃から通っている道場で土方と出会いそれ以来土方と一緒に悪戯ばかり。

・斎藤とは親友。

・ファンクラブ会員数多数。

さいとうはじめ  
斎藤一

・風紀委員長。沖田と同じく剣道部で、高2。

・沖田と同じ道場に通い、土方を尊敬している。

・沖田と同じくらい剣道が強い。

・しっかり者で生真面目だが、天然なところも。

・土方の実家で作っている石田散薬が好きだそう。

・総司と同じクラス。

とつとつへいすけ  
藤堂平助

- ・成績が足りなかったが無理して千鶴と同じ薄桜学園入学。
- ・沖田たちと同じ道場に通っていた最年少。
- ・いじられることが多い。

はらださのすけ  
原田左之助

- ・土方と、永倉と仲がいい薄桜学園社会科教師。
- ・彼に惚れた生徒は数知れず・・・。
- ・恋愛経験豊富。
- ・一番危険な人（性的な意味で）
- ・よき恋愛相談相手（笑）

ながくらしんばち  
永倉新八

- ・土方と原田と仲がいい体育科教師。
- ・とにかく運動好き。
- ・全部の運動部の顧問ができる勢い。
- ・休み時間にはよく生徒と遊んでいる。

かざまちかげ  
風間千景

- ・雪音と同じクラス。不知火とも。
  - ・一樣、薄桜学園生徒会長だがそれは名前だけで仕事をいっさいしない。
  - ・風間コーポレーションの御曹司。天霧という男は風間のおつきでつねに一緒にいる（大変だな）
  - ・我儘。俺様。
  - ・千鶴に一目惚れ。
  - ・影のファンでの呼び名はちーさま。
- 家の関係で不知火匡がいるが不知火は家の都合で一緒にいるだけ。

ゆきむらかある  
雪村薫

外見：千鶴に似てる。うん。



- ・千鶴の双子の兄。
- ・重度なシスコンである。
- ・沖田と仲が悪いらしい。
- ・風紀員。
- ・ドSな面も。

その他の登場人物サブではないが出番少ないかなって人。

こんどういさみ  
近藤勇

- ・薄桜学園校長。
- ・昔は沖田たちに剣術を教えていた。道場主。
- ・気のいい人で沖田が慕っている。

すずかせん  
鈴鹿千

- ・千鶴と同じ年で親友。千鶴と同じクラス。
- ・風間に負けない金持ちで風間とは幼い頃からの腐れ縁。

あとは山崎くんとかもいるのですが出てくるかわかんないので書き

ません。

まあ他サイトとかぶってたらすみません。

と、これから書くことをここにまとめて書いてただけです。

それと、愛羽雪音ですが、新選組の女剣客（以前連載していた駄文だらけの小説。今は削除しています）ともう一人の侍の主人公です。外見は同じですが性格がちよつと違います。まあうざっとなるようなら読むのをやめたほうがいいかもです。

設定（読んだ方がいいです）（後書き）

タイトルの読み方は

シー・ウィース・アマーリー・アマーと読みます。

ラテン語格言より。

## 入学式（前書き）

### 第一話。

君を離さない。

## 入学式

ピロロロロ。携帯が突如鳴った。

「はい。」

「もしもし。総司！？あんたいつまで寝てんの？」

沖田は目をこすりながら、目を開け、携帯を耳にあてながら、窓まで身体を伸ばした。

白いレースのカーテンを開けると、いつもの街並みが拝見できる。ふと、下へ目を向ければ何かと目立つ女が携帯を耳にあてながらこちらを睨んでいる。

「早くしないと遅刻するよ。一君はもう行ってるのに。」

「すみません……。早く支度します。」

「わかった。」

沖田は携帯を閉じ、素早く自分の部屋を出て、洗面所に向かった。

制服を着て、玄関を出ると、笑顔で彼女は迎えてくれた。

「早く行かないと一君に怒られちゃうからね。私が怒られたら総司が謝ってよね。」

「それは当然ですよ。雪音さん？どうしたんですか？」

「ええ？？ええ。実は私も寝坊しちゃって……。。」

雪音はごまかすように薄く笑っている。この一年先輩の愛羽雪音は沖田が通っている薄桜学園の生徒会書記であり、沖田が所属してい

る剣道部のマネージャーであり、薄桜学園きつての秀才であり、県内でもトップクラスの不良だった。

しかし彼女は変わり者であった。

「土方先生は・・・起こしてくれなかったんですか？」

「え？ああ。トシはそんなことしないよ。ていうか起こしてくれても私寝てるっていつも怒鳴られる。」

彼女は懷から煙草を取り出しながら言った。

彼女は何故か土方と同じ家に住んでいる。理由は詳しく聞いていないが、土方に聞けば保護者になったらしい。

「しっかし。面倒くさいな。なんで明日から学校なのにその前日に、入学式なんていかなきゃいけないのかな。」

雪音は煙草をプカプカ吸いながら愚痴りだした。

「それはこっちの台詞ですよ・・・。なんで僕が入学式に行かないといけないんですか。生徒会でもないのに・・・。」

「一君は風紀委員だから出席するし・・・。私もあの不真面目俺様生徒会長さまがやんないから行くわけで・・・。それに考えてよ。剣道部に部員勧誘するいい機会じゃない？」

「別に勧誘なんて必要ないですよ。平助は入ってくれるでしょ。」

雪音のこともあって剣道部員は薄桜学園で少ないほうだ。しかし斎藤も沖田も全国大会でもいい成績を残しているので廃部にはならない。

平助は昔沖田が通っていた道場にいた少年で、今年薄桜学園に入るのだ。

「ふーん。まあいいけどさ。」

「雪音さんがいけないんですよ。そんな派手な化粧して、制服なんて乱れまくりで・・・。」

「あんたに説教されるとは思わなかったよ・・・。」

雪音は少し苦笑すると煙草をゴミ箱に捨てた。もう少して学校だ。二人は足早に学校へ向かった。

「やべっ！始まつてる！？」

「そうみたいですわね……」

もう入学式は始まっている。斎藤に怒られる……。

二人はこっそり体育館に入ってなんとか席に着いた。目立たないようにしたが結構な新入生が二人を見た。

用意されている席につくと二人はふうと息をついた。

「遅い。何してたんだ。」

沖田の横にきちんと座っていた斎藤は沖田に向かってきつく言った。

「ごめんよー斎藤君。でもちよつと遅れただけでしょ？」

「もう式が始まって三十分だ。」

「まあまあ一君。そんな怒らないで。」

沖田の横に座っていた雪音は小さな声で謝る。

「雪音さん……もっと自重してください！あなたのそれは目立つ！」

「は、一君……」

斎藤は無意識に声を大きくしていたらしく、式が止まってしまった。

斎藤は少し顔を赤くしながらすみませんでたと謝った。

舞台の上では土方が何やら話している。

「ガラじゃないなあ……。トシがあんな真面目にしてんの。今にも出ていきたそうな顔してるけど。」

沖田はどうでもいいようにだらつとしながら新入生を見渡した。どいつもこいつも緊張しているというか……。自分もあんな顔し

ていただろうか？

いいや。してない。たしか入学早々土方に怒られた。何したか忘れたけど。

しばらく目を配らしていると平助がいた。平助は顔を赤くして前を見据えている。あれは緊張している。

「平助いたよ。」

沖田がつぶやくと雪音が。

「え？どこどこ？？あ。いた。平助！！」

「うるせえ！！そこ静かにしてる！！！」

マイクが割れるほど大きな声で土方が怒鳴った。三人は固まった。呼ばれた平助と言うと。

（うわ……。相変わらず土方さん怖ッ！もうヤダ……。雪音さんも相変わらずだな……。）

と溜息をついていた。

「平助君……。？」

横に座っている千鶴は平助を心配そうな顔で見た。

「大丈夫？顔赤いし……。？」

「だ、大丈夫だって！！！」

「そうだよ。千鶴。藤堂がおかしい訳ないじゃん。ねえ？」

割り込んできたのは千鶴の双子の兄の薫。薫は平助を小馬鹿にするような視線を送っている。

「う、うん……。？」

平助は頷くしかなかった。何時もいつも千鶴の傍にいる兄。性格は筋金入りで、平助は彼と似ている人物を知っていた。

堅苦しい式も終わり、三人は土方から逃げるように校庭へ出た。

「ふ」。あのときは心臓が止まるかと思ったわ。トシったら……。い



きなり怒鳴るんだから・・・。」

「まあ。でもあれで叫ぶのはどうかと思いますけどね。入学式には期待を膨らませる生徒でいっぱいですし。親も同じでしょ。」

「そうね・・・。って一君？何処行くの？」

斎藤は何故か背を向けてどこか行こうとする。雪音は首を傾げ聞いた。

「ひ、土方先生にご迷惑をかけてしまった・・・。」

「そんなの気にしてないよ。ねえ。一君？」

「謝りに行ってきます！」

と言うとあつという間に斎藤は校舎へ消えて行った。

「まあ。斎藤君は無駄に真面目だから許せないんですよ。」

「あんたは無駄に不真面目ね。」

「雪音さんに言われたくないです。」

雪音はそれ以上何も言おうとしなかった。反論できない・・・。

「さ。帰りましょ。平助はもういないでしょ。」

「そうですね・・・。」

と二人は帰ろうとしたのだが。

「あの・・・。」

「？」

二人が振り返ると、ピカピカの制服を着た少女が立っていた。

頬を染め、こちらを見る蜜色の瞳は恥ずかしがっているのだろうか。そんな風に見えた。

「い、いえ。あの・・・。なんでもないんです。」

（何故、私は話しかけたんだろう？）

千鶴自身こんなことをする性格ではない。何故知りもしない先輩に話しかけたのか・・・。

千鶴はさつさとそこから立ち去って行った。

「あの子・・・。なんで話しかけてきたんだろう？総司？」

沖田は目を点にして彼女が去っていた門をずっと見つめている。

雪音は何度も呼ぶが沖田は反応を見せない。

「・・・彼女は・・・・。」

「え？」

「いえ。なんでもありません・・・。雪音さん。何か奢ってくださいよ。」

「はあ？なんでよ。」

「入学式大人しく来たじゃないですか。」

「・・・・。」

雪音は頷くしかなく仕方なく沖田に食事を御馳走した。  
けれど雪音は気付いていた。

沖田は、絶対に何かを感じたのだ。

先ほどの少女から。

「面白くなってきた。」

「え？」

「うつん・・・・。」

雪音はこの好奇心を止められなかった。

## 入学式（後書き）

更新遅いです。

桜心（前書き）

第二話

待ちかねる。

## 桜心

「うー。面倒くさいなあ。」

「じゃあ、来るな。」

雪音は布団にくるまりながら学校に行きたくないと思いをこねはじめた。見かねた土方は睨みながら怒鳴ってやった。

「いやさー。昨日なんか総司が様子変だったんだー。」

「はあ？いきなり何の話だよ。」

「昨日入学式だったでしょ？なんか総司に話しかけてくる一年生がいてさ。しかも女の子。」

「はっ。あいつに話しかける物好きがいるとはな。まあ。あいつは顔がいいからな。その女は惚れたんじゃないか？」

土方は靴を履きながら言った。雪音もそのまま玄関まで向かった。土方の隣で、囁くような小さな声で。

「そうだとなんか面白いな。」

「ああ？」

雪音がとぼけているような笑顔を向けてくるので土方は頬をつねってやった。

「三年になった早々遅刻すんなよ。いつてくる。」

と振り返ることなく土方は出て行った。

「おい！千鶴。早く行くよ！」

「ちよつと待って〜！」

千鶴は部屋で必死に制服に着替えていた。入学して二日目。今日は新しいクラスに行くのに寝坊してしまった。

実は昨日中々眠れなかったのだ。理由は自分でもあまりわからない。ただ昨日の少年の驚く顔が忘れられなかった。

（あの人と話したくない……。会いたくもない……。）

そんな風に思うなど最低だ。何も彼のことを知らないのに……。けれど胸が締め付けられムカムカするのはもう嫌だった。

（先輩だろうし……。中々会わないよね……。）

「ちづ〜る〜!!！」

「今行きます!!！」

玄関でこちらで睨んでくる双子の兄は怖い。千鶴はへこへこ謝りながら。

「ごめん。薫。じゃあ行こう？」

「全く。お前のせいで入学早々遅刻だったら許さないから。」

「う……。返す言葉もないです……。」

玄関を出て、学校までの一本道を二人で歩いた。後ろを振り返って平助が来ないか見たが姿は見当たらない。先に行ったのだろうか。

「藤堂なら先に行ってるよ。千鶴が遅いから俺が行けって言っただ。」

「そっか……。薫が言ってくれたんだね。ありがとう。」

「ふん……。」

千鶴が微笑んでお礼を言ってきたので薫は純粹に照れた。

「あと、五分しかない……。千鶴！」

「え？ああつ。ちよつと！」

薫がいきなり手を掴んできたので千鶴は驚きながらも走り出した。

「ま、間に合ったかな……。」「

「間に合っていないな。」「

「へ？」「

門の前で誰もいないと思ったが薄桜学園の制服を着た千鶴より先輩と思われる男がこちらを静かに見ている。

「遅れて申し訳ありません！！」「

千鶴は頭を下げて謝ったが、薫は。

「千鶴。こいつに謝っても仕方ないよ。それにまだ遅れてなんかいない。」「

「えっ？」「

「そうでしょ？昨日入学式に居た先輩。」「

そつえば彼は昨日いた気がする。あの男前な先生がうるさいと叫

んだ先にいた人……。あの少年と、金髪の女子の横にいた人だ。  
「そうだな。正確に言えばまだ三十秒ある。」

「ふん。三十秒なんてもうすぎるよ。俺は行くからね。千鶴。」

「ええ!？」

「だってこの人がいるのはお前のチェックだよ。そのスカートとかの。そうでしょ？」

薫は歩きながら振り返らず言うと斎藤は千鶴を見て。

「少しスカートが短い。」

（なんか怖いよ〜。）

薫は見捨てた。そう思わざるおえなかった。

という斎藤は。

（俺は風紀委員として一人一人の生徒の服装を見なければならぬ・  
……。先生の期待に添わなければならない。さきほどの生徒は何  
も規則違反していなかったな。）

と超真面目な考えを巡らせていた。

チャイムは知らぬ間に鳴っていて千鶴は少し泣きそうだ。入学早々

遅刻・自分が悪いかもしれないがここまで必死に勉強して入った  
高校だ。なんか嫌だ。

「よし。入っていいぞ。」

「え？あの……。」

「何だ？」

「教室がわからなくて……。」

その時だった。後ろから足音がした。同じ遅刻した仲間だろうか。  
そう思っ振り返ると。

「あら。一君。何してんの？新入生捕まえて。」

金髪でスカートが短く、上もＴシャツが見え隠れしている。指定の  
リボンも何故か違うものだし、ブレザーもめくっている。耳にもピアス  
をしているし完全なる不良だ。千鶴は昨日の人だと一発でわかつたが  
間近で見ると怖い。中学にも不良はいたが関わらないようにしていた。



雪音はその瞳をゆらゆらさせて千鶴を見ていた。

「早いですね。雪音さん。」

「ん？ああ。そうだね。今日は割と早く起きたんだよ。」

雪音は微笑みながら斎藤の隣を通り過ぎるかと思ったが千鶴の手を掴んで少し引き寄せる。

力が強くて千鶴は心臓が飛び出そうになった。

「場所わかんないんでしょ？案内してあげる。じゃあね。一君。」

「え？あのっ・・・！」

訳もわからず千鶴は連れ去られた。

「何組かなー。あ。お名前は？私は三年・・・C組。愛羽雪音です。」

「ゆ、雪村千鶴です・・・。ええと・・・。一年A組みたいです。自分の名前があることを確認すると二人は一年の校舎に向かった。

「そっかあ。千鶴ちゃんねー。」

雪音はルンルンしながら嬉しそうに千鶴の横を歩いた。

「あの、愛羽先輩は自分のクラスに行かなくていいんですか？」

「ああ。いいのいいの。私はどうせきちんとできないって思われて

るから教師も何も言わないよ。できないのが当たり前なんだよ。」

「・・・そうなんですか・・・？」

「そうそう。私は真面目じゃないし・・・。まあ学校で態度は悪いけど喧嘩も最近してないし成績は結構いいから退学にはならない。これでいいかなって思ってたさ。」

雪音は大丈夫と笑いだす。けれど千鶴には彼女が無理をしているようにしか思えなかった。

「ああ。あそこだよ。ここらへんが一年のクラス。今頃先生が話してるところだね。入りにくいね！」

「うう・・・。」

千鶴はもう嫌になった。ここで入るなんてものすごく勇気がいるというか・・・恥ずかしい。

A組の前で立ち止まると自分の心臓の音が聞こえてきた。指の震えが止まらない。

「大丈夫だよ。千鶴ちゃん。私が開けて先に入るから・・・。」

「え？そんな・・・。」

「いいからいいから。」

と言うと雪音は勢いよく扉を開けた。一斉に皆の視線がこちらに向いた。

「・・・てめえ。何しにきやがった。」

この不機嫌な声は、昨日怒鳴った先生だ。

「あら。トシが千鶴ちゃんの担任なんだ！。千鶴ちゃん。この先生怖いから気をつけてね。しかもロリコンだから。」

「いい加減な事言うんじゃないねえ！！さっさと出ていけこの不良が！！」

雪音に思い切り怒鳴った土方はイライラが最高潮に達した。雪音は笑って。

「ごめんごめん。行きますよ。ああ。千鶴ちゃん。早く入って。」

雪音にひっぱられ教室に入れられた。皆に見られるのはやはり変わらない。千鶴は顔が赤く染まって行くのを感じた。

「お前、遅刻か。雪村千鶴だな。」

「は、はい……。すみません……。」

「あそこの席だ。お前も不運だったな。あんな女に捕まるとは……。」

「あの。聞こえてるんですけど。」

雪音は土方にぶすつとした声で言った。土方は無視し。

「えーと。じゃあ続きだな。明日は……。」

「何よ。わかんないから連れてきたのに……。」

「あ。ありがとうございます。」

千鶴は丁寧に頭を下げてくれたので雪音はご機嫌になった。

「うん。千鶴ちゃんはいいのよ。問題は鬼の国語科教師よ。」

「ああ？何か文句でもあんのか？」

「いやさー。いきなりみーんなびびってるなって思ってたさ。」

雪音は笑顔で教室を見渡す。

「お前にびびってるんだ。お前がそんな恰好で来るからな。さっさと出ていけ。馬鹿！！」

土方は問答無用に扉を閉め、鍵をつけた。

「よし。でだな……。」

と話を始めた。

こうして千鶴の新しい学校生活が始まった。

学校一、いや県内一の不良娘、愛羽雪音に捕まったことで大きく千鶴の思い描いていた高校生活は変わる……。

「やっぱり面白いな。」

雪音は一人呟きながら自分の教室に向かった。



光栄（前書き）

第三話。

穢れなき心。

## 光栄

千鶴が入学して一週間が過ぎた。千鶴は早いなあと一人思っていた。  
「何、ぼーっとしてるんだよ。千鶴。」

「平助君……。」

いきなり背を叩かれてびっくりして平助を凝視してしまった。平助とは同じクラスになった。小学校から一緒に家も隣だったので長い付き合いになる彼。中学では三年の時同じで今年もまた同じだ。

彼は千鶴と違い、元気でクラスの人気者だった。実際まだ一週間だがもうクラスの中心になってしまっている。

一番の理由は担任の土方がいじっているからだろう。

「なあ。早く帰らねえ？俺ちよつとさ……。」

「ちよつと何？」

「いや……。薫は？」

「薫は先輩と呼ばれたんだって。」

「先輩？」

「斎藤っていう先輩。風紀委員の人なの。」

「一君が？」

「知ってるの？平助君。」

平助は昔、というか此間まで近所の道場に通っていた。斎藤はその

先輩で無口だけど平助と結構仲良くしてくれたのだ。

「まあ……。一君と薫だったら大丈夫だろ！」

「え？何が大丈夫なの？」

「べつつに！ほんじゃあ、先に帰ってようぜ！」

平助にかばんを持っていかれて千鶴はそれを少し苦笑しながら追いかけた。

あれから、千鶴は平和に過ごしていた。

土方はあの女に捕まって可哀そうだと言ったがあこの不良の先輩はあれから姿をまるつきり見せなかった。

千鶴は安堵したことは嘘とは言わないが退屈してきたのかもしれない。

友達はなんとかできた。鈴鹿千という可愛い女の子。

彼女は優しくて話も合った。

ただ千鶴はこんな日々が続いてほしいと願うものの何かしたいと思うようになった……。

「はあ……。」

「何溜息ついてんだよ。土方さん。」

同じ薄桜学園の教師であり、昔同じ大学の先輩後輩である原田左之助は煙草を吸いながら頭を？いている土方にコーヒーを差し出した。

「おう。サンキュー。」

「で。どうしたんだ？」

「別に。問題はねえんだが……。」

「ねえんだが……？」

「総司の奴が変なんだよ。」

「変？」

「俺に悪戯しねえし、真面目に授業も受けるし、部活も真面目にしやがるんだ……。」

「土方さん……。」

それは当たり前のことだろう。けれど原田も沖田のことはよく知っているしおかしいと思う。

「気持ち悪くてよ……。なんかこう……。」

「わかったわかった。土方さん。総司に聞いてみたらどうだ？」

「何を？なんで俺があいつに聞かなきゃなんねえんだよ。」

土方は不機嫌に睨んでくる。正直言つて本当に怖いのだ。けれど原田は逃げない。

「だってよ。気になるんだろ？だったら聞いてやればいいんだよ。」  
「……ちつ。」

土方は舌打ちをして出て行った。原田はふうーと息を吹き、くるくる回る席に座る。くるつと一回回ると見慣れた顔が目映った。

「あん？新八。」

「土方さん悩める乙女みてえだな。」



「はあ？気持ち悪い事言っな。それに、なんでそんな汚れてんだよ。」

新八の姿は年がら年中ジャージだが、それが土に全身汚れていた。

「え？いやさー。俺のマイ生徒とたちと楽しくサッカーだよ！」

新八は無駄に輝きながら原田に見せ付けてくる。それが永倉新八だと原田はよく知っているので微笑んだ。

「それにしても……。総司の奴どうしたんだ？」

「総司。」

「ん？何、一君？話終わったの？」

胴着を脱いでいると後ろから斎藤の声がして沖田は振り返った。斎藤は先ほど仕様で出掛けていたのだ。

「ああ。雪村薫は風紀委員の仲間入りだ。あの性格なら俺が卒業した後もしっかりと学園を統括してくれるだろう。」

「そんなこと考えてるんだね……………」

沖田は少しこの斎藤の性格に苦笑した。真面目すぎるだろう。

（そういえば・・・。）

彼女は何組になっただろうか？彼女の名も知らない。

浮かぶのは彼女の不安そうな顔だった。

「どうした。総司。帰るぞ。」

「う、うん・・・。ちょっと待って。」

沖田は胴着をロッカーに持って行って行って扉を閉めた。

部室を出るときに人をぶつかった。

「あ。」

「あら。総司。もう帰るの？」

雪音は優しく微笑みながら言うてくる。沖田は少し気恥ずかしくなってきた。

「はい。失礼します。」

雪音の横を通り過ぎようとしたとき・・・。

「!？」

雪音が突如沖田の腕を掴んだ。雪音は何かと力が強く普通の男子なら負けてしまう。小学生ぐらいのこの腕なら折ってしまう勢いの力強さだ。

「なんですか・・・？」

「総司・・・。あんた・・・。」

雪音は何か言おうとして途中でやめてしまった。微笑むだけで何も言わない。

「ごめん。なんでもない。」

雪音は何故かどこかへ消え去ってしまった。まるで消えていく雪のように・・・。

「総司。最近真面目にしているようだね。クラスでの評判もいいぞ。」

「何それ。一君もおかしな事言うんだね。」

沖田は帰りの道を斎藤と歩きながら笑って言った。斎藤は真剣な顔で言うが沖田はそんなつもり全然ない。

いつも通りに過ごしているだけなのだ。なのに皆真面目だと言う。さっきの雪音もそうだ。何も言わなかったが沖田を確かめるような瞳だった。

「いつもそのぐらい大人しいほうが俺としては安心だ。」

ふふんと笑いながら行く斎藤はいつも通りだ。

そんなに自分は不真面目だったか。

いやまあ。かつてしてきたことは確におかしいことばかりだったが……。

（どうして何か、こうもややするんだろう？）

理由がわからなければどうしようもない。

沖田はどうしたらいいのか頭を抱えてしまいたい衝動に駆られた。

「それでさー。あいつが……。」

その時、後ろから声が聞こえたのでふと振り返った。いや割と聞きなれた声だったからか……。

目に映ったのは平助の全身。その隣にいたのは……。

「あれ……？総司？一君？」

「平助……。」

ともう一人。  
彼女と再会した。

光栄（後書き）

沖千臭が臭いなあ……。

そんなつもりじゃあ……。

駄文ですみません。

今回は適当に決めます。

使者（前書き）

第四話。

燃える思い。

## 使者

千鶴は入学式に自分が話しかけた男だと一瞬で気付いたが、逃げ出したい衝動に駆られた。彼を見ていると胸が痛み、苦しいのだ。

「平助。お前、まだ剣道部に入部届だしていいのか？」

斎藤はゆっくりと近づいてきた。千鶴は自分は見られていないと思っても斎藤の冷静な顔と声に驚く。恐怖も入ったかもしれないがそれほどではない。

「うつ……。だつてさあ……。。」

平助は何故だか返答に困っている。道場に通っていた彼は薄桜学園の剣道部に入るのが当たり前だった。けれども平助だつて選ぶ権利がある。それで色々悩んでいたのかもしれない。

「お前は、入学早々遅刻した女子だったな。」

こちらに話がいきなりふられたので千鶴は心臓が飛び出るほどびつくりした。目が見開かれ反応が遅くなった。

助け舟を出してくれたのは平助だった。

「一君、その言い方きついよ。千鶴、真面目だから今まで遅刻なんかしなかったし気にしてるんだよ。なあ？」

それはズバリ当たっているので千鶴は頬を赤らめながらもなんとか頷いた。

じじりと斎藤が見つめてくるので千鶴は思い切って自己紹介した。

「い、一年A組、雪村千鶴です……。あの……。斎藤先輩よろしく願います……。それと……。。」

彼を無視する訳にはいかない。と千鶴は目を向けたのだが。

彼は驚くほど真剣な表情をして千鶴を見つめていた。瞳にはくつき

りと千鶴が映っている。

「雪村？ 薫は……。」

「あ。薫は私の双子の兄です。」

「そうか。どうりで顔が似ていると思った。」

斎藤は納得するようにうんうんと頷いた。すると今度は沖田に目を向けた。

「総司。後輩に挨拶しろ。」

「……。」

沖田は中々口を開けようとしない。しばらく黙ってから。

「ごめん。一君。今日、デートだから。早く帰んなきゃ。じゃ。」

「おい！ 総司！」

沖田は背を向けてさっさと行ってしまった。千鶴だけは気づいていた。た。

沖田が一瞬こちらを見てニヤリを笑んでいたのを……。

「ん。」

雪音は家で寝ころびながらテレビを見ていたところ携帯が光ったのに気づき携帯をソファから拾い上げた。開くと珍しい名前が。

「……へー。一君がね……。」

「ああ？ 斎藤がなんだ。」



風呂上りの姿の土方歳三。タオルで頭を拭きながら雪音に近付く。

「ん？ああ。一君が、総司の様子がおかしいって。なんかね。雪村千鶴ちゃんってトシのクラスの子と平助と帰りに会ったらしくて。

けどあの総司が挨拶もなしに帰っちゃったらしい。しかもデートあるからってことで。」

「ふん。あいつ、女癖悪いだろ。一年のうちに十何人いたと思うぜ。数えてねえけどな。」

「うん。けど最近付き合ってたし、それなら自分が初めに知ってるだろうって一君が。」

「斎藤の奴……。総司に気をつかいすぎだ。」

「仕方ないんじゃない？小学校から一緒に、道場も一緒。総司も一君も普通の子とは少し違うし、一君すごい総司のこと大事にしてると思うよ。」

沖田に散々悪戯されてきた土方はあの真面目な斎藤が沖田を大事にしているという事実が面白くない。

否、斎藤があの沖田をそこまで思ってくれるのは嬉しい。

「でも……。最近、総司おかしいから。本当に。」

「……。ああ。俺も思う……。」

土方は雪音の横に座るとテーブルに置いてあったお茶を飲み干した。沖田が最近真面目すぎて気持ち悪かったのは事実だった。

「やっぱり、あの子だよ。」

「はあ？あの子？」

「千鶴ちゃんだよ……。」

「ああ？なんで雪村が出てくるんだよ。」

「言ったでしょ？入学式の時に総司に話しかけてきた一年生。あれ、千鶴ちゃんなんだよ。」

「……。そうだったのか。」

あの大人しそうな千鶴が総司のようなちゃらい男に話しかけるとは考えにくかった。

「あの時の総司の顔、いつもと違った。何かあるよ。」

「たとえば？」

「たとえば……恋？とか。」

土方は大笑いしだした。あまりに土方が笑うので。

「そんなに笑わなくてもさあ……。」

「ああ。すまねえ……。けど、あいつが恋！？ありえねえ。ありえねえ。」

土方ははっと笑いながら部屋から消えて行った。その時、雪音は考えていた。

楽しい事を……。

どんなことがあっても朝日は必ず昇る。

千鶴は寝不足な目をかきながらなんとか学校への通学路を歩く。

平助はどうやら剣道部に正式入部するそつで今日届をだすと言っていた。

（いいなあ……。平助君は、すぐしたいことが見つかった。）  
千鶴にはまだ見つからないのだ。

高校生は中学生の時と違って割と自由だ。バイトもできるし、都会

な場所で友達とぶらぶら・・・。

中学の時には許されなかったことが多少は許されるのだ。

クラブに入りたいとも思うが何をすればいいのだろう・・・。

バイトはダメだ。校則で禁止されている。

「クラブの評判とかも何も知らないもんなあ・・・。」

「なーに。独り言言ってるの？千鶴ちゃん。」

「うわあああ！」

ビックリして腰を抜かしてしまった。まさか人に話しかけるとは思わなかった。

「千鶴ちゃん！？大丈夫？」

「いてて・・・。あ、いえ・・・すみま・・・。」

顔を上げると、透明な瞳と目があった。頬は雪のように白くて目を奪われる美人・・・。金髪のまぎれもなく入学早々助けてくれた？人だ。

「愛羽先輩・・・。」

「あ。覚えてくれてたんだ。はい。」

雪音は美しいその手を差し伸べてくれた。千鶴はその手をとって起き上がった。どうしてか、彼女の手は冷たい。

「ごめんね。そんなビックリさせるつもりじゃなかったんだ。」

「い、いえ・・・。すみませんでした・・・。」

千鶴が丁寧に謝るので雪音は慌てた。

「いいのいいの。さあ。遅れるから歩こう？」

「は、はい・・・。」

千鶴と雪音は一緒に歩いた。

けれども千鶴はじろじろ見られるのでそれが耐えられなくなった。しかし途中、雪音が。

「ごめんね。私、こんなナリだから仕方ないの。薄桜学園で金髪は二人だけだしね。」

雪音だけではないのだ。まだ派手な人がいるのか・・・。

「ねえ。そういえばクラブの評判とか言ってたよね？あれって学校

のこと？」

「は、はい……。何かクラブに入りたいとは思っていますが、何かあるかもわからなくて……。」

「そうね……。なら、今日はちょうどいいんじゃないかな。」

「え？」

「今日はクラブ紹介の日だから。」

雪音の笑顔には何か裏があるような気がした。ただの直観だが。けれどクラブ紹介はいいと思う。色んなクラブの説明を体育館でしてくれるらしい。

「それで決めたら？」

「はい。そうしようと思います。」

千鶴は笑顔で言う。ちょうどその時学校に着いた。

「じゃあ。午後にね。千鶴ちゃん。」

「はい。」

千鶴は頭を下げて雪音を見送り、その後に学校へ入った。

「雪音。」

「何？空幸。」

同じクラスで高1からずっと一緒の雨沢空幸が話しかけてきた。

彼はあまりクラスで話さないので珍しい。

「今日はどうするんや？午後からクラブ紹介やけど今日も会長おらんようやしな。」

生徒会長はまだ学校にも来ていない。同じクラスだというのに・・・。空幸は生徒会でもないが色々お手伝ってくれた。

「そうだね・・・。特に準備することはないよ。今日は単なる紹介だし。」

「そうか？それならええけどな。お前はどうすんや？剣道部。」

「何が？」

「何がって。お前のせいで部員減ってるんやろ？」

雪音だけのせいではないが雪音も原因の一つだ。不良と言うのでこの割と金持ちの多い生徒たちは雪音とかかわろうとしない。土方も厳しいので入るのをためらうものは多い。

しかしこの薄桜学園は全国大会優勝という輝かしい成績を残している。それは全て沖田のおかげだが。

「まあ。最初が入ってくるよ。マネージャーもね。」

「はあ？なんでマネが入るねん。」

「そりや、総司がもてるからよ。」

「・・・。」

あまりもてない空幸は沖田のことがあまり好きじゃない。沖田は確かに自分より数段イケメンということは認めるが・・・。

「でもあんな性格ねじまがつてる奴がもてるなんて不条理だ！！」

「知らないよ。そんなの。まあ。いいじゃん。あんたはまだ顔はいいって。」

何とも言えない励ましを雪音はしてくる。正直迷惑だ。

「最初は皆、ミーハーは多いけど最終的には根性ある奴が残るの。」

ここは厳しいからね。まあ。後継者マネージャーがミーハーじゃ困るね・・・。」

「せやけど、ほんまに剣道好きで入るのは少ないんちゃうんか？ほんまに好きでも沖田とかに目いく女子は多いやろ。」

「まあまあ。私を信じなさいって。」

雪音が面白そうな顔をするので絶対いい事考えていないと空幸は思った。



## 使者（後書き）

千鶴のクラス間違えてました。すみませんでした。

高貴（前書き）

第五話。

我が胸の悲しみ。



「総司。さぼってないで体育館に来なさい。」

屋上で思う存分さぼっている沖田に雪音は怒鳴りつけた。

「えー。嫌ですよ。面倒くさい。体育館で僕が何するんですか。」

「あんたはいつも通りの練習を見せ付ければいいの。演武的なものを見せるんだから。あんたの太刀筋は演武みたいだし。」

「意味わかんないです……。」

それでも沖田は口をとがらせて動こうとしない。雪音は少し困った。いないならないでなんとかなるがいたほうが雪音にとってはいい。雪音の考えている事が実現するだろうから。

「あんた、おかしいよ。どうしたの？」

「何がですかー。僕はいつも通りしてるじゃないですか。こうしてさぼっている訳だし。」

「けど、トシには何もしてないじゃない。」

「最近は面白くできないからですよ……。」

沖田は空を見上げては溜息をつくように息をしていた。雪音はこの鉛色の空はあまり好きではなかった。

「千鶴ちゃんのこと気にしてる？聞いたよ。あんたがあんな可愛い女の子に挨拶もなしに帰ったんだってね。」

「あはは……。斎藤君、意外におしゃべりなんだよね……。」「  
沖田は苦笑して雪音を見つめた。そして目を伏せて言った。

「わかんないんです……。自分でも。ただ彼女を見ると、心が  
変になる。なんて言ったらいいかわからないけど。」

雪音はしばらく沖田を見つめたがやがて振り返った。

「もうすぐチャイム鳴るから。早く来なさいよ。」  
そう言い残し、雪音は踵を返した。

午後からは新入生のための歓迎会でもある、クラブ紹介が行われた。  
雪音は一樣生徒会の書記なのでこの場をしきらなければならぬ。  
他の正式なメンバーは皆あまり学校へ来ないのでほとんど二年間雪  
音が仕切っている。

同じクラスの雨沢空幸は手伝ってくれるが割とシャイなので前で話  
したがない。

雪音は少しやる気なさげにマイクを片手に会を進行した。

いつもながらに雪音への視線は痛い。土方や原田、永倉は雪音のこ  
とを鼻屑ではないがよく話してくれるので何もないが、ほかの教師  
はただの落ちこぼれと言う目で見るのでそれが生徒にも伝わるとこ  
ろはある。これは中学の時からずっとなので気にはしないのだが。  
式は計画通りに進んでいく。最初におめでとの言葉、この学校の  
明るい決まり……。くだらないことが多い。次にクラブの紹介。

この学校は結構部活が多いので時間がかかる。

野球部から、マイナーな博物館研究部まで……。そして剣道部の番になった。

「雪音さん。」

舞台の袖に現れた沖田。雪音は嬉しそうな顔をして沖田を舞台に招いた。

しかし問題がある。剣道の相手はいないし、胴着を着なければいけないので道場でやっているようなひ一人素振りはできないのだ。これでは話すしかない。

「総司。何か話してよ。」

雪音は小声で囁いた。

沖田は仕方がないというような顔でマイクを受け取った。

「あれ。総司だ。何やってんだ？」

平助が呟いた。千鶴は平助の隣で自分の胸を手でつかんでいた。彼が、いる。千鶴の目に映ってる。心臓が高鳴った。

「えー。新入生のみなさ……。」

「きゃああー！沖田くんー！！」

三年生のほうと、二年生のほうから歓声があがった。

これが沖田総司である。甘いマスクと人当たりのいい性格……。学校一もてる男で薄桜学園女子の憧れの的だった。

沖田は微笑みながら気にせず続けた。歓声はあがり続け、やがて沖田を知らなかった一年生も少し騒いでいる。

「あの人って剣道全国大会優勝者でしょ？マジすごい。」

「しかもすごいイケメン！！私気になるかも！」

「うんうん。今度お話に行こうよ。」

と千鶴の近くの女の子たちが同じような話を次々しだした。

「す、すごい……。」

千鶴は単純に思った。本当にモテるんだ……。

「たくよ。なんで総司の奴あんなもてるんだ。腹黒ドＳのくせしてさ。」

平助は一人ごちているがいつたい何人が平助の言葉を信じるだろう。千鶴は話したこともないのでわからなかった。

「以上です。厳しいですけど剣道に興味があつたら入部してね。」

「はい……!!」

誰も返事をしると言っていないのに女子はわーわー騒いでいる。沖田は笑顔をふりまきながら舞台から消えた。

「総司。よかったぞ。」

「斎藤君……。」

斎藤は何故か満足そうに微笑んでいる。その横で雪音も笑んでいる。「まあ。総司らしい爽やかな言葉だったね。トシがふんつてめっちや笑つてた。」

「あはは……。土方先生……。後で何しようかな。そうだ。煙草を全部水にうかせてやろう。そうしょ。」

「聞こえてるぞ……。総司。」

土方が横から現れたので沖田はものすごく苦い顔をします。

「なんだ。てめー。俺の顔見るなり……。」

「別にー。土方先生がいつもみたく煙草臭いなあと思っただけです。よ。本当、雪音さんも大変ですね。」

「大丈夫よ。私も吸ってるから。」

雪音は笑顔で言うが教師の前で言うことじゃない。斎藤は先輩である雪音にもちゃんと注意するのだが中々治らない。

「じゃ。僕帰っていいでしょ。」

「は？」

沖田が帰るといいだしたのでみんなの目が点になった。

「だって疲れちゃったし。じゃあ。」

沖田は手をふって体育館をふらりと消え去って行った。

「何だ。総司の奴。普通じゃねえか。」

黙ってみていた原田は雪音たちに近付いてきた。原田の横には永倉もいる。生徒たちは次々に教室に帰って行っている。

「いやー。まだ何かおかしい。」

「お前の言うことは当たらねえよ。新八。」

「なんだよ！左之！俺がいつも当ててねえって言うのか！？」  
うんと皆が一斉に頷いた。

「くそお……。てめえら……。。」

「ま。私の思い通りなら大丈夫だよ。」

「？」

雪音の言葉を誰も理解することはできなかった。

千鶴は適当な時間に体育館から出た。いつの間にか平助たちと離れてしまった。人ごみに紛れる中、教室へ戻っていく。

千鶴は、また無意識に彼のことを考えていた。顔も、声も、全て脳裏に浮かぶのだ。

（どうしちゃったの……。私、どうして……。こんなにムカムカするんだろう。）

ムカツクと言った方がいいかもしれない。今はそんな気分だ。そして、あの挑発的な雪音の笑み。もしかしたら雪音は千鶴のことを見透かしているのかもしれない。あのクラブ紹介の話をしたのは……。

きつと千鶴の興味を本当に向かせるため……。

千鶴は奥歯を噛みながらガツガツ歩いた。

「そんな剣幕で歩かないでよ。怖いよ。」

「っ！？」

振り返ると、ムカムカは消えて、ただの幸福が待っていると思った。

## 高貴（後書き）

自己紹介が遅れました。春桜と申します。

私は以前、沖干小説、新選組、武士たちを連載していました。薄桜鬼で検索の方は多分見つかるかと思います。

今回、タグには沖干と書いていません。なのでどうなるかは私次第ですね（笑）

今回の小説は、沖田は積極的じゃないです。よく沖田は積極的に千鶴に抱き着いたりする描写が多いと思います。けれど今回は恋愛がテーマです。キャラより人間をいかしたいと思いました。

沖田たちをひきだたせるのが雪音です。雪音は色々なことを抱えている少女で、沖田の先輩です。彼女のことも色々触れて行こうと思います。

出番が少ないのは、原田たち大人組かもしれません。私はあまり学園物は書かないので知識があまりないのでぐちゃっとなっているかもしれません。ようするに駄文。

色々な方向を考えました。一発で沖田が惚れて、ちょー積極的に18禁とかね……。しかしまあ今回は、沖干ではないですから。最終的にはわかりませんが。

未永くお付き合いできればうれしいです。  
では次回。

自由（前書き）

第六話。

信ずる恋。



## 自由

彼の目と目が合うと千鶴は自分が吸い取られそうになった。

沖田は微笑みをたやさないまま、千鶴に近付いてくる。

千鶴は声も出ず、そこからも動けなかった。

「じゃあね。」

と沖田は千鶴に触れることもせず、それ以上何も干渉しようとしなかった。千鶴は何故だか信じられなかった。当たり前のことだ。名も知らない女子に無理に干渉する方がおかしい。

けれど千鶴は勇気を振り絞って。

「あのっ！」

と去っていく沖田に呼びかけた。彼はピタリと止まり、振り返った。それでも千鶴には何も言葉は見つからないのだ。時間が止まるように頭の中が真っ白になった。

「い、いえ……。あの……。。」

「あのさあ。君。」

沖田は面倒くさそうな溜息をつきながらこちらに来る。ときどきと自分の心臓の音が彼に聞こえていないだろうかと心配になった。

「どこかで会ったことある？」

「。。。。。」

千鶴は目を点にした。あったことある？

「い。。。え。。。。」

「そうだよー。うん。きつと町で見かけたりとかだよ。いや。

僕、色んな女の子と付き合っただけで最初の方の子は顔も覚えてないから君はその内の誰かに似てると思ったんだよ。」

ふんわりといたずらに笑う沖田は明らかにからかっている。千鶴はどうしてだろうか。そこから全速力で走り去った。

色んな生徒に走っている姿を見られながら、なんとか校門の外へ出た。

もう足が痛くなって息ができないほど全力で走った。小学校の運動会の時のように。

息が上がるとともに、涙が溢れて止まらなかった……。

夢を見る。毎晩毎晩……。

私はずっと誰かの手を握っていて、そのぬくもりを確かめている。

私を呼ぶ声はどこかで聞いたことがあって本当に優しい声。

私は笑いながらその人の名を呼ぶ。

でも何故かその名がわからない……。

わからないの……。

「・・・っ！」

気が付くと自分のベットのう上だ。またうなされたのか。

千鶴は三日前からろくに眠れていない。あのクラブ紹介の日から・・・。

舞台にたった沖田総司。千鶴は、彼の魅力に取りつかれ、やはり彼に近付いていた。

あの入学式と同じ感覚で・・・。

偶然ではない。あれは自分から近付いたのだ。

このムカムカも、何もかも今まで感じたことのない事。

夢はほとんど覚えていない。あの手を握る感覚は覚えているのに。その後の怖い夢はうなされて終わる。

「朝が来たら、大丈夫。」

不安なのか、恐怖なのかわからないけど背筋が寂しい感覚は目をつむっていれば消え去る。

心の中の、千鶴の理想の誰かは千鶴を傷つけたりしないのだ。

「ねえ。もうクラブ決めた？」

「私、卓球部に入る！今日入部届持って来たの。」

千鶴の後ろの席の女子たちが楽しそうに話している。

千鶴も何か入りたいと思うものの、思い浮かぶのは・・・。

「おっはよう！千鶴ちゃん！！」

「わっ！？お、お千ちゃん・・・。」

後ろから思い切りたたかれて千鶴は驚いた。振り向けば可愛く笑っている親友の鈴鹿千がいた。彼女は中学の時から一緒に高校も偶然一緒になった。彼女は国でも有名な会社の愛娘だ。

「どうしたの？千鶴ちゃん。元気ないね。」

「そんなことないよ・・・？」

千鶴は笑いながら嘘をつく。嘘は苦手だ。すぐばれる。

「ふーん・・・。まあそんなに気になることじゃないいいけどいつでも相談してね。」

励ますように言ってくれる千の言葉は千鶴にとって本当に大切な言葉。

そんな時。千鶴の自由が奪われた。

「千鶴ちゃーん！！いるー？」

廊下側の窓から金髪の雪音は大声で叫んだ。その瞬間、教室だけじやなく、廊下にいた生徒も黙り込んだ。千鶴は口をあんぐり開けて雪音を見た。雪音は何故か満足そうに微笑んでいる。

「おい。雪音え。声でかい。ただでさえ、お前は目立つんやからあんま声だすな。」

「何よ。空幸。あんただってメツシュいれてんじゃない。私と変わらないでしょ。」

「俺は男やからええんじゃ。あー。うざいわ。朝からー。雪村さーん。いませんかー。」

どうやら空幸は一年生のクラスで話すのは平気なようだ。雪音はおかしい奴だと心の中と思う。

最後までシャイでいたらどうだと。それならもう少しモテるようになるのでは・・・。

皆が千鶴に注目する。千鶴は、ゆっくりと立ち上がり、返事をした。「あ。おはよう。千鶴ちゃん。早速で悪いんだけどちょっとこっち来てくれない？教室入ったら鬼先生に怒られちゃうから。」

雪音に言われ、千鶴は恐る恐る足を進ませた。

窓のところで、中々顔がいい男と、雪音が立っている様は、本当に絵

になるようだ。雪音は一つの紙を差し出した。

「これは……。」

「うん？ちゃんと見て、放課後來てね。女子マネ検定試験。」

「女子マネ……？」

「あなたは、剣道部女子マネージャー候補です。女子マネは一人しかなれないから。」

「ええ！？なんで私が剣道部のマネージャーなんか……。」

「私に目をつけられたからだよ。」

そのあたりから次々に生徒たちがボソボソと話し始めた。雪村とかいう言葉がところどころ聞こえる。千鶴は困惑した。

「どうしてですか！？私にだって選ぶ権利はあるはずです……！」

千鶴は嘘をついた。本当は剣道部のことを気にかけている。平助もいるし……、あの斎藤先輩もいる。そして何より……。

「だから、あの入学式から決まっていた。あなたは私たちと仲良くなるのが一番いい。」

意味深な言葉にしか聞こえなかった。

「おい。お前、言うとなるとちゃうやんけ！雪村さん、嫌がっとなるやんけ……！」

「うるさい！あんたは黙って！ねえ。千鶴ちゃん……。」

「ぎゃーぎゃー言う空幸をよそに雪音は窓から少し身乗り出す。  
「その女の子。花川さんと、渡辺さんかな？君たちもマネージャー希望でしょ？放課後來てね。」

振り向くと怯えきっている二人のクラスメイトがお互いに手を握り合っている。二人はぶんぶん頭を縦に振るだけ。

「おい。何やってる。」

「その台詞、何回も聞いたよ……。トシ。」

土方が出席簿で雪音と空幸の頭を叩いた。

「るっせえ！！それにトシなんて呼び方すんな！馬鹿野郎……！」

「そんな暴言生徒に吐くのはどうかと思うよ。ひ・じ・か・た・先生。」

（この女……しめてやるッ！）

土方は拳を震わせている。雪音は相変わらず微笑んだままだが、空幸は違った。

「何すんねん！！土方先生！！俺何もしてないで！雪音がジューズおごつてくれる言うからついてきただけやのに！！」

「こんなとこ来る事態間違ってるって言ってるんだ！！馬鹿！！お前も雪音に乗せられるんじゃない！」

「そんなキレんでええやんけ！！俺ピュアなハートなんやぞ！！傷つくやんけよ！！」

「知るか！！勝手にしとけ！ていうかお前ら早く教室行け！！チャイム鳴るぞ！」

空幸はしょんぼりしながら先に去っていく。雪音はもう一度、千鶴に笑んでから。

「じゃ。トシさん。ばいばい。」

「気持ち悪い呼び方すんな！！」

最後まで怒鳴り散らしながら土方は雪音を見送る。土方はバンツと音を立てて、ドアを閉めた。土方はその日一日不機嫌なままだった。  
・・。

長く、短く、その日の授業は過ぎて行った。千鶴はすつと溜息をつ

く。

「なんか、朝、大変だったみたいだな……。千鶴。」

「あ。平助君。」

事の事情を千から聞いた平助は昼間になってやっと話しかけてきた。どうやら千鶴は近付くオーラを出していたそうでそれを気にかけてくれたようだ。

「雪音さんは、悪い人じゃないんだけど変わってるから。まあ、マジでこつちが部が悪いよ。全く。総司と同類な性質だし、しつこいぐらいだ。」

「……。愛羽先輩……。なんで私に……。」

思わず話しかけたあの行動がこんなことになるなんて……。

「うーん……。俺にもわかんない。雪音さんって昔から意味わかんない行動ばっか。」

平助は頭を？きながら苦笑する。

「とにかく。千鶴ちゃんのはつきりするしかないわね。やるか、やらないか。」

千はまっとうな意見を言う。その通りだと思う。千鶴もはつきりしたい。

「うん……。大丈夫。私はちゃんとできるよ。平助君。今から行くよね？」

「ん……。まあ。授業終わったしね……。」

「一緒に行こう？じゃあ。お千ちゃん。また明日！」

「うん。いつてらっしやうい！」

千の見送りを受け、二人は剣道部の道場へ向かった。

薄桜学園はスポーツに力を入れている。かなりの専用の体育館や道具なども揃っている。高級品な道具も多く、この学校を希望する生

徒が多い理由の一つだ。

体育館すぐ横にある、大きい道場は剣道部のためのもの……。噂ではいい成績を残しているのだが、部員数が少ないらしい。

「うわ……。なんであんな人……。」

「今日は、いつせいに希望者を選抜するって言ってたぜ。それに千鶴も参加するんだろ？」

「う、うん……。そうだね……。」

近付いてみると、同じクラスの雪音に言われていた女子もいる。そのほかにも結構な女子の数がいる。理由は少し考えればわかった。道場の入り口でたかっているものだから平助も中々入れない。

「ちよつと……。通してくれよ！」

「無駄無駄。あんたの背じゃ無理。」

「あんだと!？」

平助の勘に触れ、平助は勢いよく振り返るがそれ以上何も言えなくなった。

雪音が竹刀を片手に立っていたからだ。

「ゆ、雪音さん……。」

「平助。あんたは試衛館に通ってたし、私も知ってるから早めに入れて稽古もさせてたけど正式じゃないのよ。」

「はあ!？　どういうことだよ!？」

「この剣道部は強い人しか要らない。ていうか入っても必ずやめます。マネージャーもそう。だから私が検定します。」

ざわざわがやまない。皆不安そうな表情で雪音を見ている。

「検定って……。どうやるだよ？」

平助が聞くと、雪音はすぐ答えた。

「私と一本勝負する。」

「!?!??」

雪音は凛々しく笑んでいたが、皆信じられず、固まったままだった。





## 自由（後書き）

実はこれは転生。けど記憶はありません。  
さあさあ。進行遅いですがどんなことになるのか・・。

純潔（前書き）

第七話。

変わらぬ愛。

## 純潔

雪音は道場の中心で制服のまま立っている。

「胴着は要らないよね。まあ、素人は重いからまず無理だ。私にどこにでも一本入れたら入部していいよ。私は何もしないから安心して。それと、今そんなにしてまで入りたくないっていう人は帰っていいよ。」

ざわめきがやまず、皆話し合っているようだった。やがてまた一人、また一人と道場を去ってく。あつという間に最初の半分になってしまった。

「ん。まあまあ、残ってるね。さあ。始めようか。君からね。」

雪音が適当に男子を指差して道場に上がらせる。千鶴はときどきしながら列に続いた。

「どうしよう……。平助君。私、剣道とか全然やったことないよ……。」

「まあ。女子はほとんどそうだよ。俺みたいに通つてるとか、クラブに入らないと無理だし。まあなんとかなるって。雪音さんは本気なんて絶対出さないし、身のこなしがうまいから大丈夫。」

平助の励ましで少しは安心するが、一つ疑問が残った。どうして自分はまだここにいるのだろうか。さっき雪音は言った。別に帰ってもいいと……。自分はやりたいと思ってきたわけではないのに……。

「ねえねえ。斎藤君。何が始まるのさ？」

「……総司か。」

「わかつてるくせにー。」

姿は見えてはいるはずだ。部室で着替えているときに沖田は斎藤に話しかけた。体育館裏手から入れる、道場とつながっている広い部室は部員が着替えるのに使う。

沖田は入り口に人がたかっているのを見て、沖田は知ってそうな斎藤に聞いた。

「今日は……部員を選抜するそうだ。雪音さんが一本勝負して勝ったら入れる……そうだ。」

「ははっ。さすが雪音さん。面白いなあ。雪音さんに勝てる新入生なんていないと思うけど？」

「そんなことはない。俺たちのような優れたものがいるかもしれないだろう。」

「まあ……ね。」

ロッカーを閉めて斎藤と部室から出る。道場に入ると、雪音と新入生が対峙している。沖田と斎藤はそれをじつくりと見る。男子だったが剣に迷いがあった。きっと雪音の仕返しが怖いとか余計な事を考えているのだろう。

「おい！何サボッてんだ！いつも通り素振りしやがれ！」

「あ。土方先生。いたんですか。」

土方は拳を震わせながら沖田のすぐ横にいた。斎藤は慌てながら。

「も、申し訳ありません！土方先生。今すぐ始めます！」

と言って素振りをすぐ始める。沖田はその姿に少し呆れる。斎藤の土方への心酔の仕方は異常な気がする。

「そんな怒らないでくださいよ。今からしますから。」

「うるせえ！俺は今日機嫌が悪いんだ！」

「だから……ん？」

沖田が見た視線の先には千鶴が竹刀を持って立っている様だった。  
「ったく。雪音の奴……。雪村にまで無理やりさせやがって。あいつ何考えてるんだ。」

沖田は土方の言葉を聞いていたが、千鶴に釘づけになった。震える指で竹刀を持っている様は美しいと思った。

「ふーん……。。」

「ああ？」

沖田がいきなり言い出すので土方は沖田を睨んだ。

「君はやっぱり、僕を追い回すんだね……。。」

「？」

沖田の意味深な言葉は全く意味がわからなかった。

「あ。千鶴ちゃん。いつでもいいよ。はい。どうぞ。」

雪音は笑顔のまま千鶴に言ってくれたが千鶴はそれが嘘のような気がする。雪音は勝負の時は人を威嚇するような目をするのだ。それはいわば新人生にとって不良とかかわったという汚点になる。薄桜学園はガラがいいとか、頭がいいとか、スポーツができるとで有名なのに自分はどんどん汚れていくのではないかと……。。

千鶴は決して雪音が悪いとかそういうことを思っている訳ではなくて、ただ不安なのだ。

彼女に勝てるかと……。。

「どうしたの？」

「えっ！？」

千鶴がためらっているのを見て、雪音は首をかしげる。その表情はもう勝っていると言っているかのよう……。。

それでも千鶴は何故か闘いたかった。自分の瞳に何かが映った。ぼ

やけてわからないけれど夢の中にいるような……。

千鶴は何も言わず、雪音に詰め寄った。竹刀を思い切り雪音の肩に向かって、振る。

するとパンツという鈍い音がして、時間が止まったかと思うほどの静けさが訪れた。

「雪音!？」

一番初めに叫んだのは、土方だった。雪音は倒れ込むこともなく立ち続けている。

しかし、雪音は千鶴を睨んでいるのだ。いつもの穏やかな瞳ではない。

「愛・羽せん・ぱい……。」

千鶴は泣きそうな顔をして雪音を見たが、伝わるわけもなく。

雪音は荒い息を繰り返して、肩を掴んでいる。けれどいきなり笑い出した。

「あははは。千鶴ちゃん。すごいなー。胴着もつけてない私の肩に本気でうつてくるなんて。」

「ご、ごめんなさい……!!」

「いいんだよ。」

雪音は肩を押さえたまま千鶴に笑顔を振りまくが、痛みで朦朧としていることがわかった。

「おい。雪音!」

土方が雪音の腕を掴むが、雪音はそれを無視し、千鶴を見たまま。

「あなたは本当に闘いたいんだね。」

「……?」

千鶴にはその意味がわからない。不意に視線を変えると、斎藤と沖田がこちらを信じられないと言う顔で見ている。

改めて自分は何をしたか思い知らされた。

「トシ。離して。まだ平助いるじゃない……。」

「馬鹿野郎!平助はお前と試合しなくても剣道部部員だ!どうせお前は入れるつもりだっただろうが!」

「あはは……。そうだね。平助は真っ直ぐっていうか……。意志があるからさ……。私が選ぶ基準は気持ちがあるかどうか……。ここで生きていくっていう気持ち……。千鶴ちゃん以外の女の子にはそれがなかった……。剣道を少しやってても不安に負ける……。全く経験がなくて……。ただ総司や一君のファンなだけ……。千鶴ちゃんは、私にぶつけてきた。千鶴ちゃん自身わからないものを……。」

「……雪村……。」

土方がこちらを見据えて、千鶴を呼ぶ。

「は、はい……。」

「お前は今日から、剣道部マネージャーだ。雪音に怪我させたんだ。入るな!？」

「は、はい!!」

土方が焦っているように見えて、そう答えるしかなかった。

「保健室行くぞ。山南さんが見てくれるし、山崎もいる。」

「いいよ。そんな面倒くさい。」

「うるせえ!お前はそればっかじゃねえか!!」

と半ば無理やり土方は雪音を連れ去った。

事の顛末を黙ってみていた平助は千鶴に近付いてきた。

「どうしたんだ……。千鶴。マジですごいぞ?俺なんかどんなことがあっても雪音さんから一本なんて取れなかったのに……。」

「そ、そうなの……?」

「雪音さんは女の子相手だから手加減してただけだよ。」

沖田がいつの間にかこちらに歩いてきていて、彼は歩きながら言った。

「それでも、雪音さんなら守ることぐらいできただろ?」

「守ることはできただろうけど、わざとしなかったんだよ。」

「なんで?打ち所悪かったらやばいのに……。」

「別にそれは気にしてなかったんじゃないかな。ただ彼女の剣を受け止めたかった……。」



沖田が切なそうな顔をしているので千鶴の胸には罪悪感だけが残った。

「どうしたの？君は何も悪い事してないじゃない。」

「え……？」

「どうして泣いてるのか聞いてるんだよ。」

優しい彼の言葉が心に染み渡るように脳内を浸食する。自分が泣いていること自体気付かない。

「総司の言う通りだ。雪音さんが言った通りにあんたは打ち込んだ。試合は相手がどうなるかと自分が勝てばいい。あんたは勝っただけのことだ。」

斎藤は真顔で言ってくれた。

「そうだぜ！千鶴。元気出せ！大丈夫だって！雪音さんは何もなしよ。仕返しとか絶対してくる人じゃないし。」

「あ、ありがとうございます……。」

励ましてくれる言葉は嬉しくて。他の部員の人も歓声をあげてくれる。

「あの鬼顧問もいないし……。雪音さんもないから解散でいいよね。」

「……仕方あるまい。」

斎藤は少し不機嫌だったがその日の部活動は終わりになった。

翌日。あまり晴れない気持ちで千鶴は一人で学校へ向かった。

最近薫は風紀委員の仕事があるので中々一緒には行けない。

（愛羽先輩・・・大丈夫かな。）

「ちつづるちゃん！おはよう。」

「うわああ！！」

前回と同じように後ろから背を叩かれびくつとなった。振り返る間もなく、雪音は前に現れた。すぐに見たのは雪音の右肩。肉眼では何もないように見える。

「あ、愛羽先輩・・・。あの・・・。」

「ああ。そういや、マネージャーに正式に入ってくれるんだよね？」

「は、はい・・・。その・・・肩は・・・。」

「ああ。全然。今じゃ痛くもかゆくもないよ。トシは色々・・・シツプはれたの・・・。山南先生の診断だけでは心配みたいで実家の薬をもらいに帰る！と言つて・・・。あの薬はマズイから嫌いなんだよねー。」

とケラケラ雪音は笑う。

千鶴はつられて少し笑った。

「まあ、そこがトシのいいところなんだけど。あつ。千鶴ちゃん。今日からマネージャーお願いね。」

そう言われ、千鶴は嬉しくなった。自分が必要とされているとわかったからだ。

「わかりました・・・。具体的に何をすればいいんでしょうか・・・？」

学校に向かいながら、千鶴は雪音に聞いた。

「そうだね・・・。別にとくにはないよ。洗濯とか、アドバイスとか、試合の知らせとか、手紙とか・・・。そんなだね。いわば雑用。」

マナージャー事態したことないのでそんなものなのかと思う。

「剣道部は血の気の多い奴が多いから。喧嘩ばやいところもあるから結構大変。ミーハーな子がやめていくのはそれがいいんだよ。千鶴ちゃんは私がいるからからかわれないと思うけど一人の時は気をつけなよ。」

からかわれるとはどういうことを言うのかわからないが気を付けたほうがいいだろう・・・。

「まあ。まだ私もいるからしんどい時とかはちゃんと言いなさいよ。休みたいときとかは早く帰っていいから。」

雪音は優しく接してくれる。千鶴は心底安心した。

「じゃあ。私は少しだけ道場行ってくるから先に行くね！」

と雪音は駆けて行ってしまふ。  
とそこに。

「おはよう。」

「!？」

横にポケットに手をつっこみながら歩いている背の高い男。甘いマスクで学校一のモテ男。沖田総司が歩いていた。

(ななななんで・・・?)

自分の隣に・・・。

「ねえ。挨拶したんだけど。クラブの先輩に挨拶するのは当たり前でしょ？」

「わわわ!!す、すみません!お、おはようございます!!」

千鶴は今更ながら自分が上がり症だと思った。

「うん。よろしい。早く行かないと遅刻するよ。はい。ダッシュ!!」

犬のように扱われ、千鶴は走るしかなかった。

その時、気づいた。心のモヤモヤやムカムカは消え去っていたことに・・・。



鈴蘭（前書き）

第八話。

恋の予感。

## 鈴蘭

五月に入って二日目。千鶴は、HRが終わって、剣道部の道場に向かつて歩いていった。

「千鶴。」

「あ。薫。」

後ろから声を掛けられて千鶴は振り返る。

「今日。母さんも父さんもいないから夕飯はどうする？」

「うーん……。そうだね……。何か作ろうか？今日、ミーティングだけだから。」

来週からテストがあるのでクラブ活動はしないのだと言う。

「わかった。何を作る？」

「うーん……。カレーとか？」

「じゃあ。食材買って帰るよ。お前も早く帰ってくるんだよ。」

薫は微笑みながら踵を返した。

（なんかお腹すいたなあ。）

マネージャーに入ってから、千鶴は平和な日々を送っていた。最初の頃の何かモヤモヤはないし、先輩たちとの付き合いもまあまあできている。確かに雪音の言った通り、剣道部の雑用は結構キツいがそれなりにこなしている。同学年は平助しかないし何の問題もない。

「千鶴ー！！」

「あ。平助君、何処に行ってたの？」

平助がはあはあと息をついでこちらに走ってきた。彼は先に道場に行っただけだと思っていたのだが、千に聞けば違うようだった。

「……しんぱつつあんのところだよ。たくよ……。保健の授業とか暇だから寝てたら呼び出しだよ。しかもこんな宿題押し付けられてさ……。」

平助が持っているものはテキストドリル五冊だった。五教科ちょうどだ。

「しんぱつつあんも左之さんも、俺が通ってた道場の先輩だったから……。先生って感じじゃなくてなんか嫌だ。」

平助が通っていた道場。そこにはあの土方も、雪音も、沖田も、斎藤もいたらしい。かなりのメンバーがそろっている。

その道場のことは平助とずっと一緒だったが聞いたことはない。

「ねえ。その道場って何処なの？先生は？」

「ん……。試衛館道場っていう今は潰れてないところだよ。先生は近藤勇って人。」

「近藤……。勇……。その人ってもしかして……。？」

「そう。この学園の校長だよ。」

千鶴は驚いた。そんなつながりがあったのか。

「土方さんは昔から器用だったから近藤さんが教師になると時になったんだって。ちょうど、この学園の枠が空いててすぐ入れたみたい。俺が中二の時に道場はなくなったからね。やめるからってこともあったけど貧乏だったから。」

「そうなんだ……。」

「総司も一君もそれぞれ二人を信用してるんだ。だからこの学園選んだんだと思う。特に総司は学校とかどうでもいいかと思ってるタイプだし。」

沖田の顔を思い浮かべる。確かに千鶴の中の沖田はどうでもよさそうな顔をしている。

「やべ。もう始まってるかな？土方さんも雪音さんも怒ると怖いから……。」

道場へ向かって歩いていたがかなり遅くなってしまった。千鶴もあわてて入口へ向かった。

「はい。遅刻ー！罰ゲームは何をしようかなー。」

雪音が二人を指差しながら言ってくる。

「そんなことあどうでもいい。さっさと終わらせろ。」

土方が雪音の横で雪音を睨みながら言った。

「何？その不機嫌な顔は。」

「わかってるだろうが！！俺の貴重な休みをお前が奪うんだからな！！！」

「そんな大げさな……。えー。さて。皆さん。わかっていると  
思いますが、今年のGWに山へ行きまーす。」

「えっ！？」

声を出したのは千鶴と平助だけだった。

「まあ。一年生の方たちはわからないと思いますが、我が剣道部では毎年GWを全部使って飛影山の妙蓮寺に行きます。泊まり込みだね。」

「どうしてだよ！？もうテスト一週間前だぜ！俺どうしたらいいんだよ！」

平助が叫んだが雪音は笑顔で返す。

「永倉先生にもらったテキストやりや大丈夫よ。各自日頃勉強して



いるだろうし。」

平助が不意に斎藤を見ると、当たり前と言うように頷いている。

「今年は三日間だけ。明日からです。準備お願いしますね。明日。六時半にここに集合です。じゃ。解散。」

「やつぱり……。あの合宿するんだね……。」

「何も問題はないだろう。平助にはいい薬だ。」

沖田と斎藤はわめく平助を見ながらこそこそ話していた。

「そうかもだけど。ねえ。一君は行くの？」

「当たり前だ。剣道部のことだぞ。俺は中々好きだがな。」

「あはは……。変わってるね……。」

沖田は苦笑して千鶴を見た。千鶴も不安がっている表情だ。

「土方先生……。あの。大丈夫ですか？」

「ああ？」

土方は不機嫌が頂点に来ているようだが一様顧問に合宿のことを聞いておこうと千鶴は思った。

「ごめんね。千鶴ちゃん。私が言い出したことだから。トシは休みが一日しかないから怒ってるのよ。」

「一日もねえよ。俺はお前と違って忙しいんだ。」

「そんな怒らないでよ。」

雪音は笑いつばなしだが困っているように見える。土方は黙って道場から立ち去った。

「雪音さん！俺全然聞いてねえよ！」

「言っていないから当たり前じゃない。安心してよ。平助だけじゃあなく、永倉先生や原田先生も呼ぶから。あんたたち仲良かったもんね。」

平助はむっとしながらも嬉しいようで安心した表情を見せる。

「さあ。私も帰ろうかなー。じゃあね。」  
雪音は手を振りながら道場を出て行った。

「斎藤先輩。合宿ってどんな感じなんですか？」

何故か平助と斎藤と千鶴は帰っていた。沖田はいない。斎藤は千鶴の目を見ながら。

「行けば・・・わかる。」

「そんなあ。もったいぶらないでください。」

「・・・ふつ。」

斎藤が笑みを漏らす。その表情は芸能人並、いやそれ以上にかつこよくて千鶴はドキリとした。

「でも雪音さんが言い出したことなら絶対よくないことだよ。しかも三日か・・・。」

「三日目はたいしたことない。朝すぐ降りて帰るからな。」

「でもさー。せっかくのGWだぜ？遊びに行きたいぜー。」

平助が駄々をこねる。千鶴もそう思った。GWにはどこに行こうかと家族で楽しい会話をしていたのに・・・。

「どうせこんでいるから人里離れたところの方が新鮮な空気を吸え

る。それでいいではないか？」

斎藤の言うことにも一理ある。田舎の方が空気が澄んでいて気持ちがいい。この都会じゃなく、田舎に久しぶりに行ってみたい。

「なあ。千鶴。来週、テストじゃん？ちよつとでいいから今から勉強教えてよ。」

「いいよ。あ。夜ご飯カレーなんです。平助君食べる？斎藤先輩もどうですか？都合がよければ家に来ます？」

斎藤は黙り込んだ。千鶴と平助を交互見ながら言葉を振り絞る。

「・・・男を簡単に家に入れるのどうかと思うが・・・？」

「な、何言ってるんですか！薫もいますって！無理に言ってるわけではないのでいいならいいですよ！？」

千鶴は少し怒り気味に言った。

「ち、千鶴・・・。やっぱ合宿終わってから・・・でも・・・。」

「いや。ここは厚意に甘えて夕飯を御馳走してもらおう。」

斎藤は少し恥ずかしそうに見える。平助の言葉を遮るし、こんなに図々しいことを言うのだ。平助は何かおかしいと思った。

「そうですか。なら私の家、来てくださいね。」

とご機嫌な千鶴はルンルンと歩き出した。

「ただいま」。薫？帰ってるー？」

玄関で千鶴が声を上げると、ダンダンとフローリングの上を歩いている音が聞こえ、こちらに薫が現れる。半ズボンとＴシャツだけという普段と全く同じ格好で薫は現れる。

「千鶴・・・なんで藤堂と斎藤が家にいるの？」

「もうっ！斎藤先輩でしょ！？薫、失礼だよ！」

千鶴が怒ると益々薫は不機嫌になる。

「ふん。で。何の用なの？」

「俺は・・・千鶴に勉強を・・・。」

「ふっ。冗談言わないでよ。藤堂。お前が千鶴に勉強を教えてもらっても意味なんてないだろう？」

「う、うるせえ！意味あるよ！」

「俺は、カレーを食しにきた。」

平助をまた遮り、斎藤が静かに言い出す。薫はバツの悪い顔をして、玄関から姿を消した。

「す、すみません・・・。平助君。斎藤先輩。」

「千鶴が謝ることねえよ・・・。」

「薫がああいう人間ということは入学当初からわかっている。あんたは別に悪くないだろう。」

平助と斎藤が優しいので千鶴は笑える。

「・・・では。どうぞ。あがってください。」

千鶴は二人を上がらせ、カレーを作り始めた。

「千鶴。お前危機感って言葉知ってる？」

台所でせつせと具をきざみ、炒めてるところに薫は後ろから囁くように言ってくる。二人には違う客間でいてもらうことにした。待っている間、斎藤が平助の勉強を見てやることになったらしい。どうやら斎藤は頭がいいので平助に教えるどころか二人で教えてもらうことになりそうだ。

「何？薫。やつぱり怒ってる？」

千鶴はクスクス笑いながら答えたが薫はむすつと黙る。千鶴の腰に手を回し、後ろから抱きしめる。

「どうしたの？薫？」

薫が少しおかしいので千鶴は聞くが薫は中々答えない。

「……今日は二人でゆつくりできると思ったのに……」  
「……と言ったことはまるで子供のようで。千鶴はまたクスクス笑う。」  
「……ごめん。夜には一緒にゲームしよう？」

「……千鶴は可愛いんだから、男連れてきちゃ駄目だよ……」

「男って……。薫。平助君は幼馴染で、斎藤先輩はクラブの先輩だよ？何も問題ないって。」

「わかってないんだから……」

薫は千鶴の鈍感さに呆れ、溜息をつくのだった。

その夜、おいしくできたカレーで好評であったが、薫の早く帰れ視線は強烈だった。



壮麗（前書き）

第九話。

真心の愛。

## 壮麗

「ま、まだなんですか．．．。斎藤先輩。」

「だ、大丈夫か？千鶴。」

薫の反対を押し切ってなんとかやってきた合宿。しかし、思った以上に山は高く、一時間は登っているのにまだまだつかない。

体力のある剣道部員たちはあっという間に先に行ってしまったのだが、斎藤だけは千鶴と一緒にペースで登ってくれている。

斎藤は手を差し伸べてくれて、千鶴は手汗がひどいながらもその手を思わずとってしまふ。手を取ると安心してよろけてしまった。

「危ないっ！」

落ちそうになったのを斎藤が腕をひっぱり支えてくれた。結果、千鶴は斎藤に抱きしめられる体制になってしまった。

目の前に、斎藤の綺麗な顔がある。

（うわー。男の人なのに肌すごい綺麗だな．．．。）

呑気に考えていたが状況をよくよく考えれば可笑しいことだ。斎藤は真っ赤な顔をして千鶴を見つめている。

「千鶴．．．。」

「斎藤先輩．．．。そういえば私を名前で呼んでくれますよね？」

「い、いけなかったか．．．？」



「いえ……。でもどうしてかなあつて。」

久しぶりに体を動かししんどくなったせいか恥ずかしいようなことを平気で聞ける自分が変に思った。けれど気になっていたのは事実だ。彼はどうして自分によく話してくれるのだろう。クラブや学校の評判を聞けば大人しくて無口で、でも頭がよくてかつこいい。そんな斎藤なのに。

「何故か……。あんたの名には聞き覚えがあるんだ……。昔から知っているような……。。」

斎藤は目を伏せて言う。

「昔に同じ名前の人いたんですか？」

「いや……。いないことは確かだ。」

そう言うと斎藤は立ち上がり、千鶴も立たせた。

「早く行かねば昼飯が食えない。早く行くぞ。」

「う……。すみません。遅くて……。。」

「気にするな。あいつらが早すぎるんだ。」

と斎藤は微笑んで励ましてくれるのだった。

「ついたあゝ。」

頂上に着いた頃には昼を少し回っていた時間だった。千鶴はもう足が限界でまともに立てない。この山は県内でも結構高い山だ。あまり高い山を登ったことがない千鶴には荷が重すぎる。

「あ。お疲れ様。はい。お茶。なくなっただしょ？」

雪音が冷たいお茶を差し出してくれた。千鶴はそれをごくごく飲み干した。

千鶴は初めて生き返るってこういうことなのかと理解した。

「一君もお疲れ。はい。どうぞ。」

「・・・どうも。」

雪音がニヤニヤしながらお茶をくれるので斎藤は警戒しながら雪音を睨む。

千鶴はお茶を飲み終えると、立ち上がって頂上から景色を眺めた。

街が下に少し見えたが米粒ほどしか見えず、周りは山だらけ。けれど天気もよく空気もおいしくて素晴らしい気分だ。

「すごい・・・。」

「ここから、夕日とか、朝日とか見るとすごい感動するよ。」

雪音が嬉しそうに言ってくる。この頂上の寺に泊まるから見れると嬉しそうに笑う。

「そうですね・・・。楽しみです。」

「さてと。昼ごはん、今から食べるから、行こうか。」

雪音は寺の方へ誘う。千鶴は自分の空腹を感じ、腹をおさえながら雪音の後についていった。

「寺の御坊様はこの日のために山を下りて寺丸々貸してくれるんだ。皆はもう広間に行っているからね。」

錆びれた寺の廊下を歩く。こういう雰囲気の場合は好きだ。雪音に黙ってついて行った先は……。

「台所……ですか？」

「うん。昼は自炊だから。こういうのはマネージャーの仕事。」

雪音は包丁を持って食材を斬り始める。何を作るかは知らない。しかし県内でも有名な不良の雪音がこんなに家庭的なのは知らなかった。

千鶴から見れば雪音は完璧だと思う。成績は学校一だし、スポーツもできる。生徒たちからは煙たがられたりしているけれど……。雪音は慣れた手つきでたんたんとなしていく。まるで料理の先生のように……。

「愛羽先輩……料理得意なんですか？」

「うん……。？ああ。得意って言うか、今もずっとやらされているし、独り暮らしが長かったんだよ。両親がいなかったからね。」

千鶴は言葉が見つからなくて黙り込んだ。

「味噌汁は完了。お米はいつらにやらせといたからいいよ。あとは漬物が……。ここに。魚は一回分だけ御坊様がくれたから鯖焼きましよう。」

と千鶴は何もせずとも雪音が全てこなしてしまった。

千鶴は雪音を尊敬し憧れるとともに自分が何もできなくて少し落ち込んだ。

雪音が作った完璧な料理を食べ終えると、雪音が突如立ち上がる。

「よし！じゃあ勉強の時間！永倉先生！原田先生！トシ！よろしく  
お願いします。」

雪音がそう言っていると、全員嫌そうな顔をして、特に教師陣が。

「えー。雪音ちゃんよ。マジで勉強？剣道部で集まってるのにさあ。  
GWだつてのにまたあ仕事？」

「お前はいいじゃねえか。新八。お前は体育科だしよ。俺なんか社  
会教えなきゃなんねえし。」

原田が新八に対してちよつとした嫌味を言う。

「おい。雪音。お前調子乗るんじゃないぞ。俺をどれだけ働かす気  
だ。この野郎。」

土方は完全にキレているようで雪音に怒鳴る。

「先生たちはわかつて来たんでしようが。総司と一君以外の剣道  
部員は万年べべに近い。それを改善するためにも清らかな落ち着け  
る場所で勉強が必要・・・だと思わない？仮にも教師なら生徒がこ  
んなにいるんだからテスト前の対策ぐらいしてもいいんじゃないの  
？」

雪音がきつく正論を言うと、土方たちは何も言えず、しかも沖田が  
同意した。

「去年だつて皆で勉強したしいいじゃないですか？雪音さんは皆に  
赤点とらせたくないって思ってくれてるんですよ。ねえ？」

「そうよ。この合宿は自立心の芽生え。当たり前のことを墮落してきたあんたたちを矯正するいい機会だと思ってね。まあ。私が卒業したらなくなると思っけどさー。」

雪音は一瞬笑んでそれを消すと、勉強開始のための準備を始めたのだった。

「はい。終わり。十五分後。隣の広間で集合。いつも通りの稽古始めるからー。」

と雪音は広間から姿を消す。

「ふう。終わったぜー。」

平助は寝ころびながらも寝る勢いでふにやっと笑う。千鶴も正直、こんなに真剣になった勉強は久しぶりだった。

「土方さんよお。あの子はなんとかならねえのか？あんたの嫁さんだろ？」

「嫁じゃねえ！結婚してねえんだから！！」

新八が言々と土方は怒り出す。千鶴は前々から疑問に思っていたこ

とを思い切って聞いてみることにした。

「あの……。愛羽先輩と土方先生って……。」

「ああ。千鶴は知らねえんだったな。土方さんは雪音と同棲してんだよ。」

原田が土方の顔をにやにや見ながら言った。

「ええ!!?」

「同棲じゃねえ!!」

と土方は言うが、実際のところ土方も保護者としてではなく一人の男として雪音が好きなので本気で否定はできない。

千鶴は衝撃を受けた。けれどこれで雪音が土方を呼び捨てにしていたのも、土方が雪音が怪我したときに一番初めに駆け寄ったかもわかる。

「そんな照れなくとも知ってますよ。土方さんが犯罪を犯してるってことはね。このロリコン。」

「てめえ!総司!ロリコンじゃねえよ!ふざけんな!」

「ふざけてません。全部本当のことじゃないですか。」

二人は喧嘩し合う。喧嘩するほど仲がいいとはこのことだろうか。

「さ、斎藤先輩……。どうかしましたか?」

斎藤がじつと黙っているのを見て、千鶴は思わず声をかける。

「いや……。俺は、この合宿はいいと思うのだ。これは雪音さんが言い出したことだ。一見、雪音さんのやりたい放題のものかもしれないが雪音さんは寂しがり屋な人だ。思い出を作りたいのもあるだろうし、俺たちの勉強のことも……。自分なりに考えてくれていると思う。」

「そうだな……。一君の言う通りかも。雪音さんって変わってるけど悪い人じゃないし、面倒だけど付き合っただけよ。なあ。土方さん。」

平助が言うと、皆土方を見て。

「わーったよ……。」

と土方は立ち上がり広間から消えた。

午後からはひたすら、いつもの稽古。雪音も胴着を着て、二年生の稽古をしていた。

土方は相変わらず厳しくて、皆嫌々そんな顔をしていたが千鶴も雑務に追われ、あつという間に夜がやってきた。

夕日を見たかったのだがそれどころじゃなくちよつと残念だ。

また夕食を作り、それが終わると、寺の風呂を沸かす。男子が入り終わり寝静まる頃に二人は一緒に入ることにした。

「なんか安心するよ。去年は女子一人だったから。まああいつていうかトシはなんだかんだ言っちゃんとしてるから守ってくれるよ。」

顔を赤らめて言う彼女はまるで幼子のように。

「土方先生。頼りになりそうです。まだ会って間もないですけど。」

「うん……。」

湯船に入るとお湯が溢れたがあつたかくて気持ちがよかつた。

「ふうゝ生き返るね。」

「ですねー……。」

千鶴もほろよい気分にだんだんなってくる。こんな山奥の風呂もいい。温泉でなかったのが残念だが。

「ねえ。千鶴ちゃん……。」

「はい？」

「マネージャーに入つて後悔してる？」

その質問に答えるのは結構難しかったが言葉を振り絞る。

「してませんよ。楽しいです。たしかにしんどかったりもしますけど……。先輩もいい人ばかりだし。」

「そう……。私は、千鶴ちゃんに無理させてるのかなって思ってたんだ。」

「え？」

「私はあなたに目をつけた。あなたが総司に話しかけた女の子だったから。まあ総司はあの顔だし話しかける女の子はいなくもないけどそれっていわゆる逆ナンの部類だしそういうこと言う子は見ればわかるけど千鶴ちゃんはそうは見えなかった。それにあの総司がちよつとおかしかった。」

胸が高鳴つて痛い……。千鶴は胸を手で押さえた。

「総司はあんまり女の子とか……。女の子に本気になったことないから。付き合っているのは全部遊びで……。総司が夢中になることつてまず少ない。けど千鶴ちゃんは……。」

「やめてください！」

「ご、ごめん……。」

千鶴が声を荒げたので、雪音はそれきり何も言わなかった。



お願いだから、私の心を彼でいっぱいにしないうで。

目がかくらんでしまうから。

私が私であるために歩いていくために

彼を思ふほど私が壊れてしまうから

私は彼を思わない。

## 壮麗（後書き）

意味わからん。次回で合宿終わり。特に意味ない合宿かもね。

菖蒲（前書き）

第十話。

お慕いしています。

この合宿の日々はあつという間だった。基本、一時間の勉強と長時間の稽古の積み重ねでほかには特に何もしなかった。

千鶴はマネージャーなので色々食事を作らねばなかったが、料理は得意だったし雪音が手伝ってくれたので何の問題もなかった。問題があるとすれば千鶴の心の問題だ。

雪音に言われた事がまだ心残りだ。心残りというかひっかかって取れない。

稽古中、無意識に自分が彼の事を見ていることに千鶴は気がついていた。

でも好きとかそういう感情があるとも思えなかった。

ただあの剣筋に見覚えがあるのだ。剣道も経験ない自分が…。

「どうかしたか？千鶴。」

「さ、斎藤先輩…。」

斎藤に呼ばれ、千鶴は涎を拭った。いつの間にやら寝ていて後で土方に怒鳴られるなあ…と思い落ち込む。幸い、斎藤は千鶴が寝ていたことに気付いていない。

「もう夕方だ。雪音さんの手伝いをしなくていいのか？」

「あつ！そうでした！！」

千鶴は勢いよく立ち上がって斎藤の隣を通り抜けた。

一瞬、千鶴が振り返ると、斎藤が微笑んでいた。

それが満足そうに見えて、千鶴にはよくわからなかった。

「す、すみません…。愛羽先輩。もうできあがりました…?」

「ああ。千鶴ちゃん。うん。もうできたからいいよ。」

雪音は微笑して、両手に漬物の乗った皿を持ち、それをこちらによこす。

「はい。持っていてー。あ。明日は朝ごはん食べたらずくに帰るから。準備してね。朝ごはんは今日用意するからね。」

「はい。わかりました。」

千鶴は頷いて皿を受け取ると、皆の集まる広間に向かった。

机を並べてご飯をつく生活は嫌いじゃない。今日で終わりと思うと寂しく思うぐらいだ。

家のほうがいいという方が多いかもしれないが千鶴は全く気にしなかった。

先輩から、皿を並べていくと皆疲れ切っているようで居眠りしている人が何人もいる。

土方でさえ少し疲れ切ってぐったりしているようだった。

やがて雪音が最後に入ってきて、全員が席に着いた。

「はい。では皆さん頂きましょう。今日、食べれることに感謝して残さずいただくこと。以上、いただきます。」

と雪音が号令をかけるといっせいに皆食べた。少しビックリして、千鶴もあわてて食べた。

「相変わらず、お前の作る飯はうまいな。」

土方が雪音の横で小さく笑う。

「ありがと。そんな事ばかり言ってるからトシはもてるんだね。」

「

ふん。」

と土方は鼻で笑った。

「でも。合宿はきついぜ。もう行きたくねえ。」

「何言ってるの。平助。来年もあるわよ。千鶴ちゃんがやるって言うならね。」

「ええ！？千鶴はどうする？やるの？」

平助に話をふられ、千鶴は迷うことなく頷いた。

「ほら。千鶴ちゃんはやるから平助も参加ね。大変ね。土方先生は。」

「

雪音に話をふられても土方は何も言わなかった。

会話らしい会話もここでは無縁なような気がした。千鶴は明日は休みという希望を持って風呂に入った。

床につく前に、千鶴は景色を見ながらお茶を飲むことにした。五月

だがまだまだ寒い。寺はさびれているので今にも潰れそうな屋根が見上げれば見えた。

平和と思いつつ、目を閉じる。疲れているのですぐに眠れそうだ。部員はもう眠っているのか物音さえも聞こえない。たんに耳が悪いからかもしれないが。

声が聞こえる。聞こえる。

私を呼ぶ声が…。

「んっ…。」

目を開けると、胸があつた。色白だけがっちりした大きな男の胸板が…。大きな手が差し伸べられそれが頬に触れる。

それが気持ちよくて千鶴は笑った。そのまま深い眠りにしてしまった。

「全く…。こんなところで寝たら風邪ひいちゃうのにさ…。」

沖田は溜息をつきながら彼女を優しく起こしてやった。横抱きにすると持ち上げる。その時、千鶴が沖田の着物の襟をひっぱってきた。「やめてよ…。ヒドイなあ。」

沖田はどうしてこんなことしたのか自分でもわからなかった。彼女が廊下で寝ていてほっておけばいいものを何故か触れなくなった。抱きしめなくなった。好きでもないのに唇が恋しくなった。

（僕は、素直にはなれない性格なのかな…。）

自分の意志をコントロールできないとはおかしい話だ。

彼女に避けられている気がする…。それは事実だ。彼女は目を合わせてくれない。

でも何故か見られている気がする。太陽のような瞳に…。

「雪音さん。いいですか？」

「ん？総司？」

雪音に扉を開けるよう促し、雪音が扉を開けこちらを見る表情を思い浮かべた。

沖田の予想と全く同じで沖田はクスクス笑みを漏らした。

「どうしたの…アンタ…。なんで千鶴ちゃんが!？」

「廊下で寝てたんですよ。ぐっすりだね。風邪ひくと思って持ってきました。」

差し出された千鶴を雪音は不思議そうに受け取る。

「そ、そう…。でもあんたがこんなことするのは珍しいね。あんたはさっぱりしてるところあるからこんなことしないと思ってた。」

「本当、雪音さんは失礼ですね…。」

「う。ごめん。まあ…総司が届けたとか言わないほうがいいね。じゃ、おやすみ。」

「ちよつと待つてください。どういう意味です!？」

「千鶴ちゃん…。ていうか総司、本当に気付いてない？」

雪音に聞かれた意味もわからない。だから何も言えなかった。

「ま。おやすみ。明日は早いから早く寝なさい。」

とぴしゃりと扉を閉められた。沖田はしばらくその場で立ち尽くしたのだった。



翌日。

山を降りるのも千鶴には辛い。

「う…。」

「大丈夫か？千鶴。」

登るときと同じように斎藤は千鶴の傍にいてくれた。

斎藤の手を思わず求める。ひっぱって欲しい衝動に駆られる。理性でなんとか止めるが体力と酸素が奪われて理性も失われていく。

「斎藤先輩…すみません。本当、迷惑ばかりで…。」

「いや。気にするな。迷惑でもないしな。」

斎藤は冷たいように見えるが本当に優しい。この合宿でそれが一番わかったかもしれない。

「すみません…。」

千鶴は再度謝った。斎藤は苦笑するばかりだ。

「来週のテストは安心しろ。絶対にいい点が取れる。」

「えっ？」

「合宿で一時間勉強していただろう。あれは先生もいるし集中した環境でできる勉強だ。いつもの家ではなく違う所でしたほうがいい。雪音さんは剣道部員の成績があまりよくない事を気にしていたんだ。」

「そうだったんですか…。」

「こんなことがあるのも学生だけだしな…我慢してくれ。」

「大丈夫ですよ…。我慢もしてないです。」

千鶴は薄く笑った。その時、何かのはずみかで足が階段から滑ってしまった。その時、後ろから引き寄せられた。目を思わずつむり何が起こったかわからない。

「大丈夫か…？」

耳元で声がした。振り返ると斎藤の瞳がある。暗いように見えて輝く瞳。千鶴の顔がその瞳にうつると胸が高鳴った。

「すみません！斎藤先輩！あの…。」

みだらな格好になっているこの状態だ。千鶴は焦った。

「俺は気にするな。立てるか？」

「は、はい…。」

斎藤はゆっくりと立たせてくれた。千鶴は怖かったと同時に反省した。

「怪我していないな？」

「は、はい…。」

斎藤は不意に、千鶴の手を握った。瞬時に顔を赤くした千鶴は叫んだ。

「さ、斎藤先輩！？」

「危ないだろう。さっきのようにこけられては困る。」

その手が汗ばんでいないか千鶴は終始気にしていたのだった。

菖蒲（後書き）

スランプです。すみません。

出現（前書き）

第十一話。

きよらかな愛。

## 出現

週は明けてGWの気分が残っている雪音は窓からぼーっと校庭を眺めていた。

「おい。雪音。」

「空幸……。どうしたの？」

朝一番に空幸に声をかけられ不思議に思った雪音は空幸の浮かない顔を見て聞く。

「合宿はどうだった？」

「大丈夫だったよ。何の問題もなし。あつという間で楽しかった。

あ。これ此間ドライブ行つたときのお土産。食べてね。」

雪音が差し出したのは何処にでも売っていそうなクッキーの詰め合わせだった。お土産のセンスが全くない雪音であった。

「あ……。ありがとう。」

ぎこちなく空幸は受け取り、すぐに話しに戻った。

「雪音。知ってるか？」

「え？何が？」

「今日、あの俺様生徒会長様が学校に来るんだと。このクラスだ。」

「あ……。そっぴや名前あつたね。不知火君も可哀そうに……。」

不知火は会長と家のつながりがあつたので嫌々一緒にいらせられていた。それを痛々しく見ていた二人は同時に溜息をつく。

「あそこに車があるぜ。俺たち運が無いのかねえ。三年間あいつと

同じクラスとは…。」

「まあいいじゃん。金髪がクラスに二人いるっていうのもさ。」

「お前はいいかもしれないが周りは迷惑だ。」

きついことを何も気にしないで言うのが空幸のいいところだと雪音は思う。クラスで雪音が浮いているのは昔からだった。中学の時から素行が悪い雪音は皆から白い目で見られるのは当たり前のことだった。

「会長も私と同じなんだろうか…。」

「ああ？あいつがお前と同じ？ないない。…噂をすれば…。」

振り返ると金髪に紅の瞳。規定の制服ではない白い学ラン？を着ている風間千景がいた。背筋伸ばしている彼はどこかの国の王子のよう目で目を奪われる。話さなければ完璧だ。

「俺のクラスはここか…？相変わらず小汚い場所だな。」

風間の後ろには風間に仕えている天霧と、風間の友達である不知火がめんどくさそうに立っていた。

「この私立でそんなこといつちゃあ御仕舞だよ。会長。」

雪音は浅くツツコミを入れる。風間はいたことも気づかなかったような目つきで雪音を見た。

「愛羽か…貴様も学期が変わったというのに相変わらずだな。」

「会長に言われたくないよ。」

「ふん。俺のいないうちに何も問題はなかっただろうな？俺の責任になるのだからな。」

「あんたがそんなこと気にしてんのかい！それにしてももう三年始まってんのに一月も来なかったってどういう事？留年しちゃうよ？」

雪音はどうかしてしまっただかのように声を張り上げてしまった。クラスの皆がひいているのがわかった。

「ちよっとしたバカンスで世界を回っていた…。留年なんぞせんぞ。俺のテストを見たか？お前と同じ学年一位だ。」

どうだというように風間は高笑いする。どんどん皆が引いている。

もともと風間はお金持ちで変わり者なので周囲の人々は関わらないようにしている。

「はいはい。よかったですねー。私は部活があるので放課後残って色々頑張ってくださいねー。」

雪音は席につくと風間のほうをいつさい見ず、ボーっとし始めた。

風間はその隣に座り、雪音をずっと睨んでいた。

昔から二人には壁がある。その壁は見えないので誰にもわからないのだが空幸にはわかってしまった。

同じ金髪。同じように頭がよく、同じように顔が整って、同じように周りから理解されない二人。

二人には共通点が多いのも関わらず仲が良くなかった。

「たくよ。愛羽が不機嫌になる理由もわかる俺ってやばいかもな。なあ雨沢。」

不知火に話を振られ、空幸は知るかと一言つぶやき去る。

クラス全体が険悪ムードに包まれたのだった。

放課後、いつものように千鶴は道場に向かった。

「千鶴ちゃん!!」

「あ、愛羽先輩?」

息を切らして一年の廊下を走ってくる雪音。周囲はいつかの時のようにしーんと静まり返っていた。

「どうした?雪音。」

ふと顔を上げると教室からちょうど出てきた新八と原田と目があつた。

「あ。原田先生、永倉先生。」

「もう今日のクラブ活動できないと思って…言いに来たの…。」

「はあ?どういうことだ?」

「会長が学校に来たからよ…。あいつの趣味は知ってんでしょ?」

「げっ!?!」

と先生たちが不安げな声を上げる。千鶴にはちんぷんかんぷんで不思議そうに周りを見つめた。

「私らじゃ奴を止められないしね…。千鶴ちゃん。とにかく今日は帰っていいから。」

「えっ!?!?どういうことですか?」

「いいよ。千鶴。お前は帰った方がいい。あとは俺たちでなんとかするからな。」

なだめるように原田が言ってくれたが気が落ち着かない。

「じゃ。そういうことで!」

と兎のように雪音は走り去っていく。先生たちも雪音の後を追う。その背中をぼーっと見つめ立ち尽くした千鶴だった。



「平助君！」

「千鶴？どうしたんだ？先に道場行くんじゃない。」

平助は役員の仕事をたまたま頼まれていて残っていたのだ。平助に先ほどのことを話すと平助は知っていたようだ。

「まあ大人しく今日は行かないほうがいいよ。変なことに巻き込まれるかもしれないぜ？」

「そんなこと言ってたって……。」

「ほら。薫と帰ればいいって……。て薫は風紀委員の仕事か。」

早くも斎藤にかわって風紀委員の仕事を全面的に任された薫は千鶴よりも帰りが遅かった。

「やっぱり私、道場に行ってくる！」

「あ。おい！千鶴！！」

千鶴は平助を無視し、道場まで走った。

道場の前では例のごとく静けさが満ちていて気味が悪いほどだった。今日は入りに行くのも辛いほどだ。けれど千鶴は向かっていった。何を求めてとかそんなものじゃなかった。ただ試練へと向かうような…。

道場に入った瞬間。

何故か大昔のどこかにいるような感覚がした。

宣言（前書き）

第十二話。

無限の悲しみ

## 宣言

千鶴は燃える赤い瞳と目が合った。

綺麗だけど恐ろしい瞳…。千鶴はその眼から逃れられないと思った。

「あっちゃー…。」

雪音は額を押さえ、目を伏せる。最悪だ。一度道場へ戻ったら突然千鶴が来てしまいこの様だ。

風間は恋愛に関して、悩んでいた。顔が良いので付き合ったりは出来るのだが性格が筋金入りなので長くは続かない。

内心困った風間は一年生でいい子がいないかクラブを回るのだ。

千鶴の良さを知っている雪音は風間のタイプだと見抜いていた。

だから会わせてはならないと思っていたのに…。

「あの…。」

千鶴は風間に懸命に話しかけている。そんな事なくていい…。

「はい。帰ってね。風間会長！」

雪音は彼の肩を押し、道場から出そうとした。腕をつねると風間は目で雪音に死ねと言っている。

「黙れ。愛羽。俺に触るな。」

「うつさい！あんたこそ帰れ！仕事もしないぼんぼん会長が！！あんたたち！練習しときなさい！！」

雪音はついにキレ、後からポツリポツリと来た部員に叫んだ。

その中には沖田と斎藤がいる。

「どつという状況なの…コレ。」

沖田は横にいる斎藤に訊いた。

「知らぬ。しかし雪音さんがあれほどキレるのは大事のようだな。

大人しく彼女の言う事を聞こう。」

あの有名な会長の事は沖田たちも知っていたが関心を持った事は無かった。

しかし、風間が見ている先は千鶴だ。千鶴は何故、あんな男に目を向けるのだろう。

二人は不思議でたまらなかった。

「遅かったか…。不知火でめーちゃんと止める！もう持って帰れ！」

「うるせえよ！原田！天霧もいねえのにアイツ持って帰れとか無茶言うな！」

「お前等いい加減にしろよ。喧嘩すんな。な。」

「騒がしいね…。」

沖田は思わず溜息をつく。道場の門の前で教師と不良生徒が喧嘩するというのが馬鹿馬鹿しくてならない。

「其処！うるさい！帰れ！」

雪音は風間を押し、道場から追い出し、扉を閉めた。

「ふうー……。千鶴ちゃん！どうして来たの！？」

千鶴は雪音に怒鳴られ、固まった。自分はやはりいけない事をしたようだ。

「あ……。すみません。帰ります。」

「駄目！！帰ったらまだアイツがいるでしょ！！！」

肩を思い切り掴まれ、千鶴は眉を思わず顰める。申し訳ない気持ちが溢れた。自分がどうしてここにきてしまったのか。それは…。

「もついい…。あんたら練習！」

雪音は怒鳴りながら千鶴から離れていく。ただ千鶴が見ていたのはあの金髪の男が出て行った門だった。

（あの人の目…。）

あれに見覚えがある。夢に出てきた事がある。怖いけれど優しい瞳…でも好きじゃなかった。

帰り道。なんとなく心が晴れない千鶴は平助と帰る事を断った。何時もは家が隣なので帰るのだが…。

明日は部活が無い。中間考査の一週間前になるからだ。

（帰って勉強しなきゃ…。）

中学までは時間があつたので沢山してきた千鶴だったが、最近は部活があるので帰ったら疲れて勉強する気になれないというのが事実だ。

その時、千鶴は足を止めた。何かが背中にいる…そんな気がしてならなかったからだ。

辺りは真つ暗…街灯があるだけ…。

千鶴はゆっくり振り返る。するとまた赤い瞳と目が在った。

「雪村：千鶴だな。」

男はそう尋ねた。低い声でどこかへ誘うかのような声色だった。

「は、はい…。」

学校の先輩だし、そこまで警戒する必要はないだろうと思い、返事をした。このまま去っていくのも失礼だ。

「剣道部にはよく出入りしているのか？」

「はい。マネージャーですから。」

「あの女の下にいるのか。お前も苦労するな。」

と男は千鶴に近付いてきた。千鶴は動けなかった。彼と目をずっと合わせていた。

彼も千鶴を見ている。どこか不思議な目で。

「千鶴：お前を気に入った。俺の妻になれ。」

「はあ？」

と即斬り返していた。なんだこいつはと千鶴はぼーんと口を開けていた。

「気に入ったから妻になれと言ったのだ。」

「意味わかりませんよ！何で妻！？何時の時代ですか！！だいたい名前も聞いて無いし！」

感情があふれ出す。信じられなかった。この男の発言の意味がわからない。

「風間千景だ。覚えておけ。」

と風間は千鶴の腰を掴み、引き寄せると耳元で囁いた。そして何事もなかったかのように踵を返した。

息が出来ないほど顔が真っ赤だ…。

熱でもあるのだ。帰ったら測ってみよう…半ば呑気な事を考えながら再び千鶴は歩き出した。

これからどんな事が待っているか 全く考えずに。

「千鶴。」

「何？薫。」

薫が不機嫌そうに制服のネクタイを弄びながら千鶴の部屋に入ってきた。学校へ行く準備をしていたが着替えはすましてあったので問題は無い。

「家の電話番号教えた？」

「え？誰に？」

「男。」

「男！？」

そんな記憶は全くない。家の電話番号、ましてや携帯の連絡先など

男の人に教えた事などない。

「電話がかかってきたんだよ。千鶴はいるかってね。全く…名前聞いたらさあ。千鶴に訊けとか偉そうに言うんだよ。後、自分は千鶴の未来の夫とか。あの電話の主…もう一回かけてきたらどうしてくれるようか。」

「あはは…薫、黒いよ。」

薫は風間だと気付いていない。でも薫は発言した事はやる人だ。風間も薫の手にかかってしまえばどうなるかわからない。

それにしても何故、風間が自分の家の電話番号を知っているんだ？いやそれ以前に風間のする行動が読めない。今後、何かに巻き込まれたらどうしよう。

朝は平助と薫と千鶴の三人で学校へ向かったので何事も無く無事に学校についた。

平助と別れ、教室に入ると、いつもは各それぞれで会話をしているクラスメイトが一斉にこちらを向いた。

その視線は好奇の目と冷たい視線とで構成されていた。

「やっと来たか。我妻よ。遅れるかと思ったぞ。」

と声の先は、千鶴が何時も座る席からした。静まり返った教室で輝く金髪をなびかせた風間が不敵に笑んでいる。

「な…。」

声が出ないほど千鶴は驚き、口をぱくぱくさせてばかりだ。

風間は立ち上がり千鶴の傍までやってきてニヤリと笑んだ。頬に手が添えられたその時――。

「なーにやってんだ。風間…。」

出席簿を今にも投げつけそうな剣幕の土方が現れた。風間の手が離れ、千鶴は解放された。

「我妻に会いに来ただけだ。貴様は何時も俺の邪魔をするな…嫉妬でもしているのか？」

「ああ？何訳わかんねえ事言っただよ。我妻？はあ？気持ち悪い。」



土方は吐き捨てるかのように言い、風間を目を細めて睨む。

「もうチャイム鳴るぞ。早く帰れ。風間。いいか？もしまたこの教室に来たらてめえ俺の補習授業受けて貰うからな。総司と。」

それを聞くと風間はバツの悪い顔をした後渋々帰って行った。千鶴はその間何度も土方に礼を言った。

「あの…土方先生…。」

「雪村。アイツの事は雪音に言え。俺じゃどうしようもねえ。」

「え…？」

土方は千鶴と目を合わせず、窓の外を睨んでいた。

## 宣言（後書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした。まだ続けるつもりですので  
長にみてもらえると嬉しいです。

冷淡（前書き）

第十三話。

どこまでも離れない。

## 冷淡

その日は教室から一步も出なかった。昼ご飯を食べる前に手を洗いに行ったくらいだ。

理由はあの風間千景に会うかもしれないから。

生理的に無理とかそんなんじゃないのだが、あんな風にこられてはたまったもんじゃない。

御蔭で、授業中まで千鶴と風間の話でもちきりだった。

クラスメイトの話では、風間はこの学校にかなり投資している会社の息子らしい。だから教師も何も言えず、お手上げ状態だと言う。

そう風間はどうしようもない我儘な人間なのだ。

（まあ…意味不明な言動してるもんね…。）

と千鶴は若干酷い文句を垂れていた。あんなに恥ずかしい思いをしたから仕方がないのかもしれないが。

HRの時間。何時もより疲れていた千鶴は暫くぼーとしていたが、何故か土方が何時もよりかつこよく見えてしまい顔を赤くした。

今日…風間を追い出してくれたからか、何時もは鬼のように見える土方も神様に見えてきた。

「雪村。しっかりしろ。」

「へ？」

気が付けば土方が千鶴の頭を軽く叩いていた。撫でるの方が近いかもしれない。

「机下げて、掃除に行け。何ぼーっとしてやがんだ。」

「あつ。はい！すみません！！」

千鶴は慌てて机を下げ、箒を取りに行った。

彼女の背中を土方は細い目をして見ていた。

掃除が終わり、千鶴は部活に向かった。向かう時でさえ、彼と会うのは不安だった。

「千鶴ちゃん。」

「愛羽先輩……」

そんな中、優しい彼女は名前を呼んでくれた。そういえば……土方が雪音に言えと言っていたのを思い出す。

「愛羽先輩……。あの、風間さんの……」

「あの俺様会長？もしかして、千鶴ちゃんに何かしたの？」

「昨日電話があつて……兄が出たんですけど……今日は教室に居て……」

千鶴が言い終わる前に、雪音は深いため息をついていた。

「ごめんね……。アイツ、教室に来なかったから学校に来てないと思つてた……。アイツ案外、行動力あるんだよね。……。うーん。」

「す、すみません……」

「何で千鶴ちゃんが謝るの。悪い事無い。大丈夫。私がいる限りはアイツは何も出来ないよ。」

「え？どうしてですか？」

「彼奴は……私のことが嫌いだから。」

「嫌い？」

「似た者同士だからね……同族嫌悪つてやつよ。だから私が言えば大丈夫なんだよ。でも千鶴ちゃんに本気だったら聞かないと思うよ。」

その時は……千鶴ちゃんも考えてあげてよ。」

「ですけど……わたしあの人の事知りませんし……」

「話すのも鬱陶しいかもしれないけど頑張つて。私はね……千鶴ちゃんなら大丈夫だと思うの。風間会長の彼女。風間会長つてさ。変わ

つてから理解されにくくて誤解されがちなんだよ。あんなに態度でかいから陰口叩く奴はいくらでもいるからね。」

千鶴は彼の事がわからなかったが、なんとなく理解されにくい性格だと思っていた。

だから彼も辛いし、少し人とズレているのだと思う。

「金持ちって色々大変だよ。会長は・・・好きでもない相手と結婚させられるかもしれないんだって。それって……すごく可哀そう。」

そういった彼女の目は美しかったが、儚い瞳だ。

千鶴は深く、考えた。そしてその思いは部活中にも及んだ。

「変だよなあ。千鶴の奴。」

「何が。」

「ぼーっとしてるっか、生気がない？」

平助は千鶴を見ながら隣にいた原田と永倉に言った。土方が用事でいないので仲のいい二人が生徒たちを見ていた。それに、平助と同じ道場にも通っていたので平助や斎藤、沖田とも仲が良かった。歳は離れているが。

「千鶴ちゃんも年頃なんだから色々あんだよ。わかってねえな！」

平助は。」

「うるせえよ！しんぱっつあんだけには言われたくねえ！」

「なんだとー！！」

と子供のようにいがみ合う二人を柔らかな表情で原田は見ていた。

「ほんと、馬鹿だね。そう思うでしょ。一君。」

「どうでもいいが。総司。お前、何かあったか？体調でも悪いのか

？」

調子が悪いと言われて、沖田は苦笑した。斎藤は妙に鋭いところがある。

「何でもないよ。」

そう言いながら千鶴を見てみた。彼女は完全に心ここにあらずだ。そんな彼女を何故自分は見ているのだろう。

次に雪音と目が在った。雪音は沖田を突き殺すような目で見ていて、常に彼女は劔だ。人を殺すような目で見ていて。それは怖い意味ではなく、人の真実を常に見る目。

そんな目を持つている人はそういない。

沖田は自分の感情全てが彼女にバレているのではないかと思った。自分でも気づかない心の奥の感情も。

（もう六時か・・・）

千鶴が帰路についたのは六時だった。薫は生徒会の仕事を家でやるというすでに家に帰っていた。

お腹がすいた…そう思いながら食べ物屋の前に通るのは少し苦痛だ。

「はあ・・・。」

「溜息をつくとは関心せんな。」

「！！！！」

ぎよつとして振り向くと風間の満足気な微笑みがあつた。かつこよくて言葉も出ない程綺麗な顔をしている。

「今日は、一日中暇で仕方が無かったぞ。愛羽に会いたくなかった

から部活にも顔を出せなかったしな。まあ・・・いい。こうして会えた訳だしな。」

そついうと道の真ん中で彼は千鶴の腰を掴み、引き寄せる。

「きゃ！」

「可愛い声をする。」

とまた嬉しそうに風間は笑い、引つ張つていく。

「ど、どどこ何処に・・・？」

「俺の家だ。お前の家にもなるがな。」

「ちよつと！！困りますよ！離してください！」

人通りのまだ少ないところでマシだったと思う。こんな姿、同じ学校の人に見られたらどうなるか。

風間はどんどん進んでいく・・・。千鶴は抵抗する事もできなくなっていた・・・。

「なーに、いちやいちやしてるの。千鶴ちゃん。」

優しい声だった。この声・・・。

振り返ると物凄い笑顔の沖田総司が其処に居た。

「貴様は…沖田。」

「あはは。こんなところで会うなんて奇遇ですねえ。風間会長。ところで・・・うちのマネージャーに何やってるんですか？セクハラ？」

「はん。此奴は俺の妻になるのだ。何がセクハラだ。」

「その発言もセクハラですよ。会長。千鶴ちゃんを離してください。見てるこつち、気分悪いんで。」

風間の力が抜けたので千鶴は振り払い、沖田の後ろに隠れた。しかし彼は千鶴など見向きもしなかった。

「会長。聞いてますよ。雪音さんにこつてりしばかれたって。いい様ですね。」

「貴様…何故・・・。」

風間はかつてないほど焦っているような表情だ。

「雪音さん。何でも話してくれますよ。貴方が十歳までお…。」



「それ以上言うな！！貴様覚えていろ！！」  
と完全敗北の言葉を口にしながら風間はあっという間に消え去っていた。

「あの…沖田先輩。」

「もう暗くなるから気をつけて帰りなよ。」

「はい。あの……。ありがとうございました。」

「あのさあ。」

沖田は振りまいて、思い切りこちらを睨んでいた。

「嫌なら嫌ってはつきり言いなよ。さっきも誘拐されそうだったじゃない。」

「誘拐って……。」

「僕が何時も助けられる訳じゃないんだから。風間につけられたくないなら彼氏の一人でも作るんだね。ほんとと、後ろから見てて気分最悪だったよ。じゃあね。」

散々嫌味を言ってから沖田は行ってしまった。

千鶴は申し訳ない気持ちと、何とも言えない虚しさが心に痛かった。  
(どうして…あの声が沖田先輩に聞こえたのだろうか？)

優しい夢に出てくるあの声が沖田と同じだった……。それは勘違いなのだろうか？

## 冷淡（後書き）

更新遅れたし、あんまり進んでません（^^;）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2120r/>

---

Si vis amari, ama

2011年6月12日10時00分発行